



2020年度 年次報告書

熊本大学 教授システム学研究センター
Research Center for Instructional Systems

〒860-8555

熊本県熊本市中央区黒髪2丁目40番1号

電話：096-342-2895

ウェブサイト：<http://www.rcis.kumamoto-u.ac.jp/>

目次

センター長挨拶	2
オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言	3
FD活動の客観的な成果分析の枠組みについての提言	7
教授システム学研究センターの構成	10
インストラクショナルデザイン研究部門	11
学習支援情報システム研究部門	13
各部門の説明：地域連携システム研究部門	15
eラーニング推進室	16
FD活動支援室	17
教育関係共同利用拠点の5つの取り組み	18
共同利用拠点事業①公開講座	19
共同利用拠点事業②IDポータル	34
共同利用拠点事業③公開科目	39
共同利用拠点事業④講師派遣	42
共同利用拠点事業⑤オンラインプログラム	53
持続的な産学共同人材育成システム構築事業	63
連携研究員	72
研究成果	77
参加報告（国内学会1）	81
参加報告（国内学会2）	82
参加報告（国際学会1）	83

センター長挨拶

コロナ禍に翻弄された2020年度は、人類史上に残る転換期になるのではないかといられております。各方面で人材育成に携わる人たちにとっては、大活躍の1年であったかもしれませんが、他方で、例年踏襲ができないことに翻弄された1年であったかもしれません。本センターはもともとオンラインでの活動を主軸にしてきたため、「非常事態」にはなりませんでしたが、様々な点で、これまでを振り返り、今後を考える良い契機を与えられた1年でした。

本センターは、コロナ禍での経験を受けて、2つの提言を公開しました。「[オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言](#)」と「[FD活動の客観的な成果分析の枠組み](#)」です。また、あわせて、これからのコンサルティング活動の指針として、「[講演型FD研修会を脱却するための研修モデルについてのご提案](#)」も公開しました。コロナ禍での様々な経験を今後に生かし、ワンランクアップの人材育成に取り組むための参考にしていただければ幸いです。

2017年度に我が国で初めての教授システム学の研究拠点として設置された本センターは、その実績が高く評価され、設置2年目の2018年9月には文部科学省の教育関係共同利用拠点として認定されました。本年度の再申請を経て、認定の継続（2021年度から2年間）が認められました。『教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点』における事業は、(1)ID公開講座、(2)IDポータル等による情報提供、(3)公開科目による学修機会の提供、(4)FD研修講師・大学教育設計コンサルタントの派遣、(5)授業改善のためのオンラインプログラムの5つの取組みを柱としています。引き続き、積極的な「共同利用」をお願いいたします。

3年目となる本年度は、履修証明制度となった(5)「[教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）](#)」有料版を2期運用することと並行して、「[教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）](#)」の無料版を開発・公開しました。さらに、FD担当教職員を対象とした第3弾（FD活動支援編）の構想にも着手しました。また、これまでオンライン学習と対面学習を組み合わせで行っていた(1)ID公開講座については、オンデマンド研修とリアルタイム研修をブレンドし、その全てをオンライン化するという新しい取り組みも行いました。

また、本年度は、令和元年度より認定を受けている文部科学省の「[持続的な産学共同人材育成システム構築事業](#)」（令和元年度-5年度）において、「産学連携教育イノベーター育成プログラム」を開講し、熊本大学が提供する「インストラクショナルデザイン指導力育成コース」では、12名の方が実務家教員を目指して学習を進めておられます。

研究の最先端としては、学習支援情報システム研究部門を中心に、ラーニングテクノロジスト（LT）の養成をインストラクショナルデザイナー（ID）の養成と二本柱で進めていくための構想を練り、カリキュラムを策定し、博士前期課程に組み込む準備を進めてきました。これから求められる専門職業人としての学生募集を早期に実現できるよう、教授システム学専攻と一体となって実践的な研究を進めていきます。

最後になりましたが、本報告書記載の諸活動や[本センターのウェブサイト](#)をご覧ください。ことで、本センターの活動にご理解をいただき、今後とも皆様からのご指導、ご支援をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

教授システム学研究センター長（2017.4～2021.3）

鈴木 克明

オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言

コロナ以前に戻さないためのモデルの必要性

コロナ禍で無防備のまま強いられたオンライン授業への転換で、もっとも多数派を占めたのは授業をそのままライブの形で提供しようとしたリアルタイム型授業と授業の録画を配信したオンデマンド型授業でした。そのどちらもが実現できない状況下においては、資料配布型（資料を配布したうえでレポート作成・提出を求めるもの）も見られましたが、この形式については、これでは不十分であるとの認識も広がったとされています。2000年頃のeラーニングブームでは、リアルタイム型を行うにはネットワーク環境が不十分であったことから、ほぼすべてのeラーニングは非同期のオンデマンド型であったことと対照的な現象でした。

重田（2020）は、「オンライン授業」という「めったに用いなかった用語で呼称されたことは、非常に興味深い（重田2020：p. 6）」と指摘しました。これまで行われてきた講義や演習をインターネット上で実施するにあたり新しいタームが自然と求められた背景には、「遠隔教育」が持つ「大学間、キャンパス間で行われる遠隔合同授業」というイメージや「eラーニング」が持つ教職員向けコンプライアンス教育などの個別的・義務的なイメージがあったと指摘しました。また、教育における技術導入のレベルを4段階に整理したSAMRモデル（代替・拡大・変形・再定義：訳語は三井ら、2020による）に依拠して、「いわゆる『オンライン授業』は、これまでの大学教育のやり方をオンラインツールにより『そのまま』代替しているだけであり、大学教育における教え方・学び方に変化を起しているとは言い難い（p. 6）」とし、「これまで必ずしも前向きに受容されてこなかった現実を直視することが大前提となる（p. 6）」と変革への過度の期待に対する警鐘を鳴らしました（以上、鈴木・平岡、2021より引用）。今回のオンライン授業が4段階モデルに当てはめてみたときにどのような事例がどれにあたるかを確認し、それぞれの段階を例示することで、単なる「代替」に留まらないポストコロナ時代のICT活用のイメージを持ってもらうことが求められているように感じます。

参考)

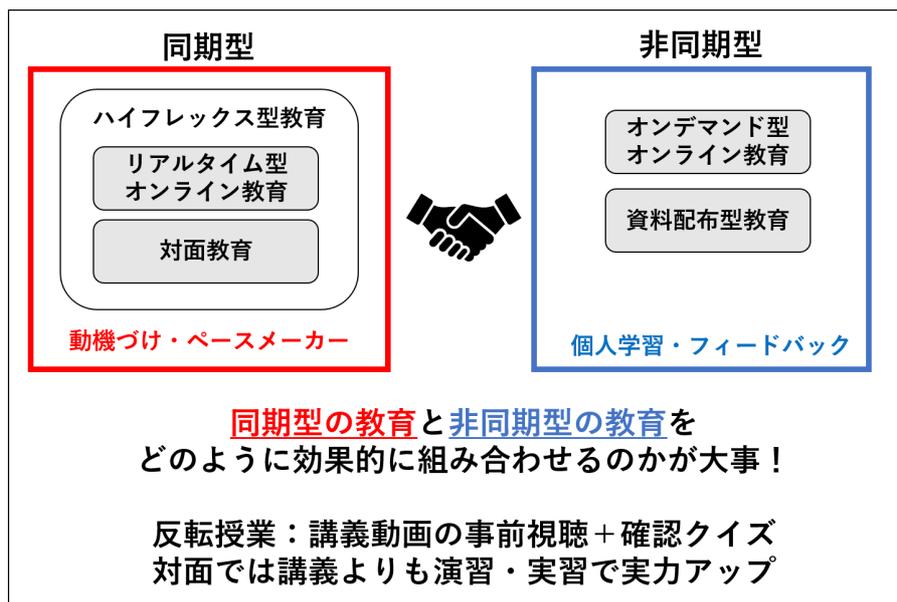
鈴木克明（2021）「大学らしさを取り戻すトランスフォーメーションを（高等教育トピック）」『じゅあJUAA』（大学基準協会広報誌）第66号，pp.7

鈴木克明・平岡齊士（2021.3）「ICTを活用した授業デザイン原則の提案-交流距離理論の足場かけ総量再解釈に基づいて-（特別寄稿）」『名古屋高等教育研究』第21号，pp.143-165

対面授業と同じ形で配信が可能になったことは、有事への対応を容易にした反面、アフターコロナにおけるコロナ以前への回帰も容易にすることを意味します。学生からは、ICTを活用した授業への転換を求める声が寄せられており、コロナ以前への回帰は必ずしも歓迎されないと予想されます。また、コロナ禍で学生間に格差が生まれたことの原因には、自宅などでの通信環境の整備状況のみならず、主体的に学習を進める姿勢やスキルによって生じる格差もあったことが報告されています。前者の通信環境については改善できる見通しがあるとしても、後者の主体的な学習を進める姿勢やスキルの育成については、「スタディスキル」関連科目などでの取り組みは散見されますが、大学全体として、より組織的な取り組みが求められています。以上から、アフターコロナの大学の授業をコロナ以前に回帰させることなく、また学生が希望しているICT活用を継続・促進し、その中で本来大学が担うべき大学生に育てるべき主体性・自主性の育成を達成する新しいモデルの構築が求められています。

同期型と非同期型のハイブリッド

そこで、いわゆる「高度なメディア利用」条項の解釈に基づいたオンデマンド型とリアルタイム型のすみわけによるオンライン授業のデザインなどに特化した主張をさらに明確に打ち出すために、「新たなモデル」を提案します。コロナ禍で普及したオンライン教育には、オンデマンド型とリアルタイム型、ならびに資料配布型がありました。これらのオンライン教育と対面教育の良い組み合わせを模索するという視点ではなく、同期型と非同期型をどう組み合わせるかに着目すべきであることを主張します。すなわち、リアルタイム型のオンライン授業と対面教育並びにその両者を組み合わせた「ハイフレックス型」教育はすべて同期型教育であり、対面であれオンラインであれ、これらの同期型教育と非同期型の選択肢（すなわち、オンデマンド型と資料配布型）をどのように効果的に組み合わせるのか、という視点に立つことを提案します（下図参照）。



図：同期型教育と非同期型教育を組み合わせる

人材育成について一緒に研究しませんか！ 熊本大学教授システム学研究センター

コロナ禍で、講義をやめる 最大のチャンス到来！



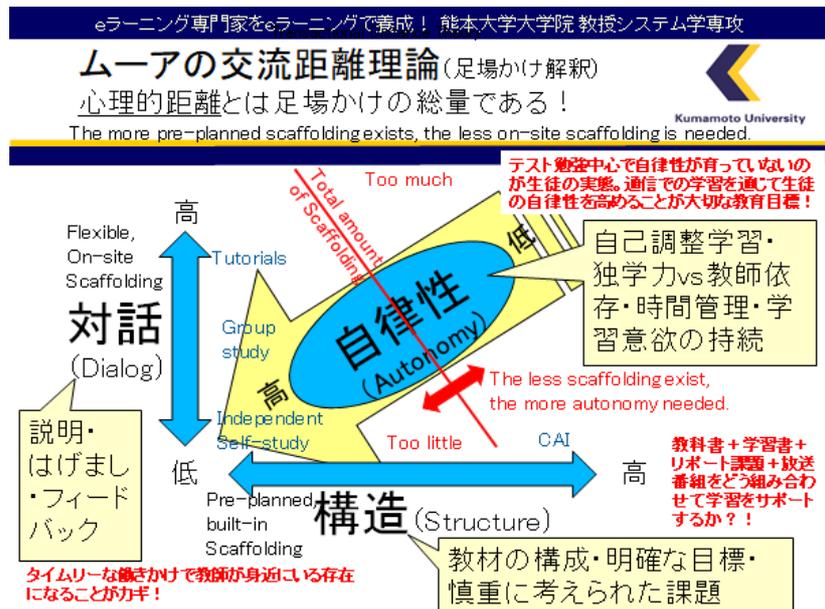
Kumamoto University
大学院社会文化科学研究科
教授システム学専攻

- ・ 対面授業：講義・演習・実習
 - 一斉授業＋グループ活動＋個人学習
- ・ オンライン授業：緊急措置から併用へ
 - リアルタイム（同期型）：動機づけ、ペースメーカー
 - オンデマンド（非同期型）：個人学習＋フィードバック
- ・ 対面とオンラインの何をどう組み合わせるのか
 - 反転授業：講義動画の事前視聴＋確認クイズ
 - 対面では講義よりも演習・実習で実力アップ

eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院教授システム学専攻

遠隔教育研究からの示唆

通信教育から開始されて長年の伝統を持つ遠隔教育の領域では、対面教育に比べての劣勢を克服し、遠隔教育でこそ実現できる教育の価値についての議論が長年行われ、それが遠隔教育の実践者の精神的支えになってきました。ポストコロナ時代の大学においてもキャンパスにおいて展開する対面教育が主軸となるにせよ、遠隔教育の体験が広範囲に広まった今、これまで遠隔教育研究から得られる示唆を取り込んでいくという視点が重要です。鈴木・平岡（2021）には、これまでの遠隔教育理論の研究系譜がまとめられており、そこから学生の自律性育成という大学教育の使命を実現するためのデザイン原則が提案されています。このことを踏まえて、コロナ禍後の大学教育のニューノーマルとは何か、そのモデルを提案していきたいと考えています。



eラーニング専門家をeラーニングで養成！ 熊本大学大学院 教授システム学専攻

withコロナ時代の

大学授業デザインの要諦

- 自律性育成デザイン ← 交流距離 (構造 × 対話)
- 授業の学習支援デザイン 足場かけのフェードアウト
 - 誰に: 入口 (基礎知識、学習力、好み等) 暗記以外を目指す
 - 何を: 出口 (あたま・からだ・こころ、基礎vs応用)
 - どのように: 教えない教育、責任移譲で学習力育成
- 授業以外の学習支援デザイン
 - 学習支援センター・ラーニングコモンズとの連携
 - ピアチュータリング: 教えることで学ぶ経験
 - オフィスアワーの活用: オプション利用の積極性
 - キャンパスライフ: 大学に来ることの意味

注：コロナ後のFD研修で用いたスライド例

授業以外の学習支援活動を視野に入れたキャンパスライフ再設計

授業の改善には、学生の自律性を育てるという観点からの整理が必要です。他方で、それに加えて、次世代の大学をデザインしていくという観点から、授業以外の取り組みについても検討していくことが重要でしょう。キャンパスに来なくても学べるという経験をしたデジタルネイティブたちを再び、キャンパスにつなぎとめるメリットは何か、魅力をどう演出していくかも検討する意義があると考えます。授業の改善には、学生の自律性を育てるという観点からの整理が必要です。他方で、それに加えて、次世代の大学をデザインしていくという観点から、授業以外の取り組みについても検討していくことが重要でしょう（鈴木・美馬・山内，2011）。

コロナ禍への対応に対する提言についての実績

コロナ禍に直面した際の大学教育のデザインの在り方については、以下のような情報発信を行いました。非常事態への対応とアフターコロナ（平常時になった以降）の対応を切り分け、無理しないこと、同じ形で教えようとしないこと、シラバス記載の授業目標をできるだけ達成できる学習環境を整えること、「教え続けること」ではなく「学び続けること」を達成するために非同期型の学習機会を組み入れることなどの7つの提言を海外動向やこれまでの研究成果をもとに発信してきました。

- 鈴木克明（2020）「無理はしないで同じ形を目指さないこと：平時に戻るまでの遠隔授業のデザイン」，4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム【第4回】，国立情報学研究所大学の情報環境のあり方検討会
- 鈴木克明（2020）「オンライン教育設計の7か条」『月刊先端教育』2020年6月号，pp.18-20.
- 鈴木克明（2020）「実践的遠隔授業法」『IDE現代の高等教育』2020年8-9月号，pp.27-31.
- 鈴木克明（2021）「大学らしさを取り戻すトランスフォーメーションを（高等教育トピック）」『じゅあJUAA』（大学基準協会広報誌）第66号，pp.7

参考)

鈴木克明・美馬のゆり・山内祐平（2011.3）大学授業の質改善以外の学習支援にどう取り組むか：学習センター関連資格制度についての米国調査報告。日本教育工学会研究論文集，11(1)，pp.181-186

FD活動の客観的な成果分析の枠組みについての提言

教育活動の成果を評価する指標には様々なものが考えられます。FD活動をより客観的に評価し、その成果を確認していくことは、効果的なFD活動を継続していくために不可欠です。本センターでは、FD活動の客観的な成果分析の枠組みについて、以下のように提言します（本センターのこれまでの活動のなかでは、「公開講座」に各レベルでの成果分析の先進事例が紹介されています。併せてご覧ください）。

FD活動については、例えば研修会を何回実施し、何人の参加者を得たかが報告されることが通例です。それに加えて、受講者からのアンケートに基づいて、今後の活動計画などを策定することもよく行われています。さらに、活動の成果を客観的に評価するために参考になるのは、1959年にカークパトリックによって提唱され、企業などの研修を評価する枠組みとしてデファクトスタンダードになっている4段階評価モデルが参考になります。

レベル	評価項目	データ収集ツール
1. 反応 [Reaction]	参加者は教育に対してどのような反応を示したか？	・受講者アンケート
2. 学習 [Learning]	どのような知識とスキルが身に付いたか？	・事後テスト ・パフォーマンステスト
3. 行動 [Behavior]	参加者はどのように知識とスキルを仕事に生かしたか？	・フォローアップ調査 ・上長アンケート
4. 結果 [Result]	教育は組織と組織の目標にどのような効果をもたらしたか？	・効果測定チェックリスト ・ROI（投資利益率）指標

図：カークパトリックの4段階評価モデル

4段階評価を参考にFD活動を評価する場合、以下のように当てはめることができるでしょう。FD活動を行い、参加者が多数得られたこと（あるいは参加率が高かったこと）は、4段階には含まれていませんので、レベル0としました。これは、4段階モデルでは、研修（FD活動）を行うこと自体は目的ではなく、手段と捉えられているからです。

- ・レベル0：イベント開催数、参加者数（年次変化）
- ・レベル1：イベント参加者アンケート調査（年次変化）
- ・レベル2：参加者の学習成果（修了証授与数）⇒ここからはできていない場合が多い？
- ・レベル3：参加者の行動変容（フォローアップ調査）
- ・レベル4：参加者の行動変容のインパクト
 - 4－1：授業改善による学生の授業評価結果の向上（受益者のレベル1）
 - 4－2：単位取得率の改善（受益者のレベル2）
 - 4－3：関連資格取得数・率の向上（受益者のレベル3）
 - 4－4：FD活動の位置づけ・認知度や受容度や期待の変化（FD活動のレベル4）
⇒FD担当者組織の拡充、人員の増加なども視野に入れるか

カークパトリックのレベル4は、組織レベルでの結果ですが、大学などにおけるFD活動の場合、そこから収益をあげることなどは求められない場合が多いため、教職員が研修を受けることによって参加者の行動が変化したことの受益者である学生にどのようなインパクトがあったかを確認することが考えられます。さらに、FD活動の成果が学内、あるいは学会などで認められ、FD活動に対する予算措置や人員措置が得られるという組織的な結果も視野に入れることもできるでしょう（次ページのNADEの評価指標を参照ください）。

参考) NADEの学習支援センター認証制度における評価指標

学習支援センター存続のために学内の理解を得るために学会を組織し、認定制度を行ってきたNADEでは、以下の2つの表に示すような指標を使って、センターの活動の成果を自己評価することを求めています。一般レベル(表4)ではレベル0とレベル1に留まっている一方で、上級レベル(表5)では、より上のレベルでの成果のエビデンスが要求されていることが読み取れます。

表4 NADE 学習支援センター認証に必要な評価指標項目(科目関連学習支援:一般レベル)

<必須データ項目>

1. 年度・学期ごとのセッション数
2. 年度・学期ごとの参加者数(重複カウントなし)
3. 年度・学期ごとの参加者満足度

<選択データ項目:下記より1以上報告>

4. 参加者数(上記2)が対象学生数に占める割合
5. 分類ごとのデータ(実験・ワークショップ・セッションなどのサービスタイプ別, 対象学生の学年別, GPA 別, その他の重要な学生属性別, 実施時期別, コース要求度別, 入試時の学業スキル別)
6. 参加者ごとの平均参加時間数
7. レベルごとのファシリテータの総数と平均人数
8. ファシリテータの研修満足度・勤務満足度
9. サービス向上を示すその他の指標(事前相談必要)

出典:Thompson & Graham (2010)の発表資料による

表5 NADE 学習支援センター認証に必要な評価指標項目(科目関連学習支援:上級レベル)

<必須データ項目:一般レベルに必要なすべてのデータに加えて>

1. 喫緊度・重要度が高い科目群について, 参加学生の評点を最低回数(通常3回以上)のセッションを経てから次の指標1つ以上で分析すること:不参加学生の評点との比較, 参加学生がサービスを利用しなかったら得ただろうと申告した評点との比較, 参加学生の当該科目非放棄率, 参加学生の獲得評点割合, 参加セッション回数別評点分布。

<選択データ項目:下記より1以上報告>

2. 参加回数分析(影響を及ぼすためには最低何回参加が必要で, 何回以上はそれ以上の向上が見込まれないかを示す)
3. 参加者の当該学期, 次学期, 次年度, 2年次以降の継続率
4. 参加者のGPAまたは要観察状態の参加前後の変化
5. 参加者の学習方略の利用に関する変化(自己報告またはテスト)
6. 科目内の課題ごとの評点変化(参加・非参加者比較)
7. 参加者またはファシリテータの量的・質的成長(認知スキル;批判的思考力, リテラシー, 知的成長, メタ認知, 学習方略など. 情意スキル;市民性, リーダーシップ, 親密性, 協調スキルなど)
8. ファシリテータの学術的リーダーシップスキルの開発(事前・事後テスト評価, セッションノート, または指導者の観察レポートによる)
9. ファシリテータの辛抱強さ・継続率
10. ファシリテータのGPAの参加前後の変化
11. ファシリテータの卒業データ(就職率, 進学率, 転学後の成績など)
12. 学生の成功を示すその他の指標(事前相談必要)

出典:Thompson & Graham (2010)の発表資料による

出典:鈴木克明・美馬のゆり・山内祐平(2011.3) 大学授業の質改善以外の学習支援にどう取り組むか:学習センター関連資格制度についての米国調査報告. 日本教育工学会研究論文集 11-1:181-186(表4と表5)

教授システム学研究センターの構成

教授システム学研究センター（Research Center for Instructional Systems; RCiS）は教授システム学の世界的研究拠点を目指す以下の3つの研究部門と2つの事業部門から構成されています。

<研究部門>

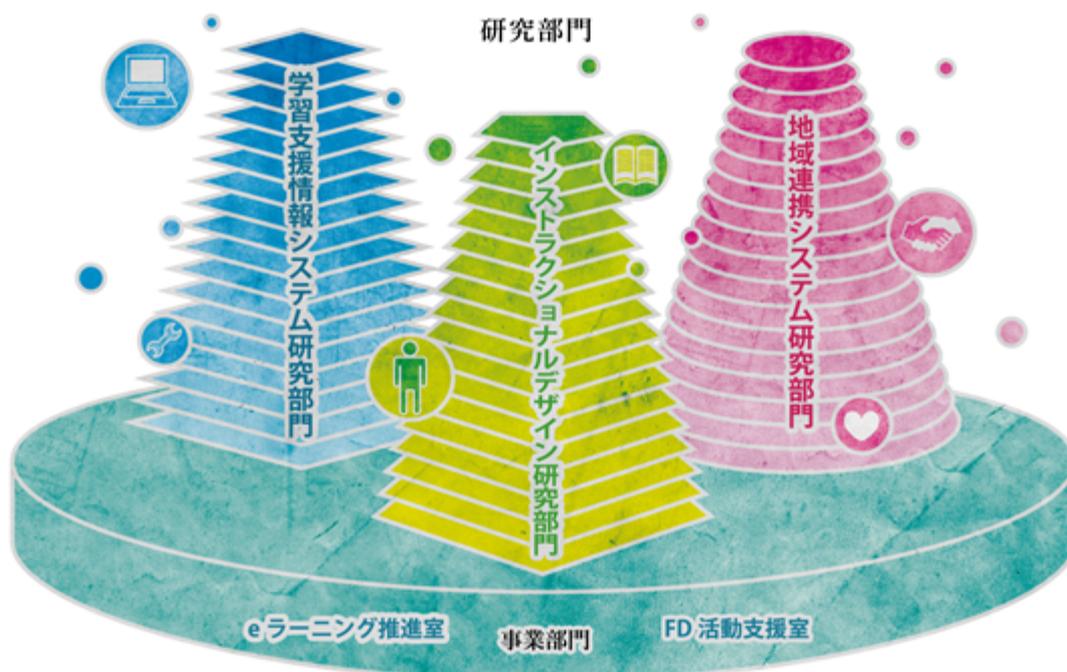
- インストラクショナルデザイン研究部門
- 学習支援情報システム研究部門
- 地域連携システム研究部門

<事業部門>

- eラーニング推進室
- FD活動支援室

本センターは実践的フィールドを学内外に有し、高等教育や職業人教育を対象とした研究を展開していることが特徴です。

日本初の教授システム学研究拠点として「教授システム学、インストラクショナルデザインなら熊本大学」というイメージを発展的に具現化し、国内外の研究拠点との連携を進め、企業・高等教育機関などの連携研究組織および本学教授システム学専攻修了生などからなる連携研究員との共同研究を通じて、教授システム学を発展させ、社会に貢献します。



教授システム学研究センターの構成

インストラクショナルデザイン研究部門

ID研究部門では、「人の学びを支援する」研究として以下を推進しています。

- eラーニングを開発・実施・評価できる高度専門職業人の養成
- 教授システム学領域の研究者養成

本部門の今年度の主な取り組みは、以下の通りです。

(1) 国際学会等、オンラインイベントのオーガナイズ・進行 (合田)

以下2つの国際学会について、オーガナイザーおよび進行として参加しました。

- IEEE TALE2020, General-co- Chair
- APSCE SIG 6 Technology Enhanced Language Learning, Chair

IEEE TALEは、今年度はVRを活用してオンラインで開催され(次ページ上側の図を参照)、本センターのスタッフもその運用に貢献しました。また、上記以外にも、オンラインで開催された様々なシンポジウム、ワークショップ、ウェビナーの司会進行を行いました。

(2) オンラインワークショップ方法の精緻化 (平岡)

2020年度は授業・研修の改善を目的としたオンラインワークショップを多数実施しました。その中で、運営側の相談用の裏チャンネル(Skype、Facebook)を用意する、GoogleDoc等を利用して資料共有ページを用意する、参加者のITリテラシ・タッチタイピングに差があることを想定する:メモ係を設定する、GoogleDocやJamboard等を利用してコメント記録シートを用意する等、円滑なオンラインワークショップにつながる工夫を抽出・整理し、情報としてまとめました。

(3) 対面・同期型と独学の連携 (鈴木・平岡)

コロナ禍における大学の授業実施に対するアドバイスとして、独学でしかできないことと対面でしかできないことを分けた上で授業設計することをまとめ、SS研教育環境分科会等で提案(次ページ下側の図を参照)、同期型と非同期型の授業の違いについてまとめ、提言(*1)および論文(*2)として発表しました。

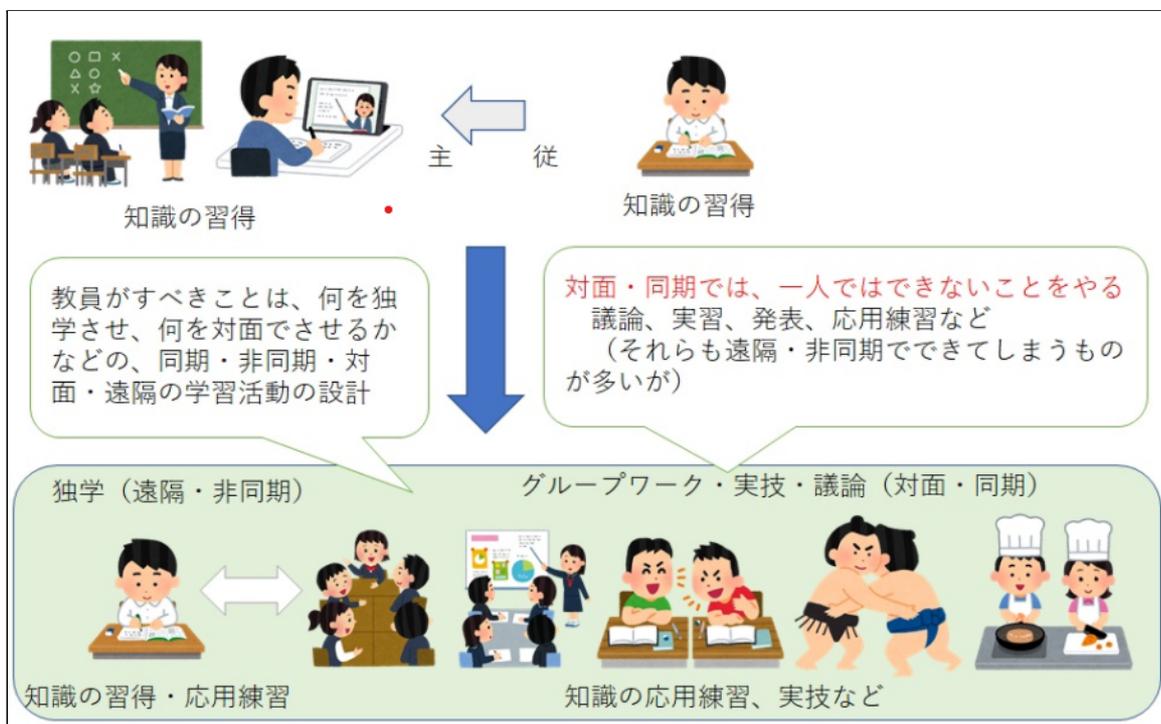
*1教授システム学研究センターウェブサイト: [オンライン教育の新たなモデルの構築に向けた提言](#)

*2平岡(2021)ICTを活用した教育設計-非同期学習の設計を中心として. 産業精神保健, 29(1), 12-17

以上の活動に加え、これまでの取り組みや研究を書籍や論文などとして公表しました(本報告書の研究成果:PXX参照)。また、研究成果の普及活動として、関連学会での活動、IDポータルでの運用や、商業雑誌への記事掲載など、積極的に行っています。



図：IEEE TALE開催の様子



図：SS研教育環境分科会

学習支援情報システム研究部門

学習支援情報システム研究部門は、本学及び高等教育機関一般、地域での人材育成に役立つオンラインツールやアプリケーションの開発を行い、それを用いたICT 利用教育を実践を行っています。また、インストラクショナルデザイナーと並ぶ専門職としてAI技術やデータサイエンスの教育利用を促進する「ラーニングテクノロジスト」がその重要性を増していることを踏まえた研究も行っています。本部門では2020年度、以下のような研究プロジェクトに貢献しました。

(1) 教育で防ぎ得た重大事故を防ぐ能動的LMSを軸とする安全教育システムの実現 (喜多)

本研究では、「子どもの傷害予防」「環境安全工学」「救急看護教育」の3分野を対象として、教育を行うことで防ぎ得た重大事故を防ぐための安全教育システムを実現することを目指しています。2020年度は教育システムの一部として、LINEを通じてチャット形式で重大事故を防ぐための知識を学習できるクイズが出題されるプラットフォームを構築しました(次ページ下側の図を参照)。尚、本研究は科学研究費助成事業の基盤(B)として採択されており、早稲田大学・国立研究開発法人産業技術総合研究所・名古屋大学・日本赤十字九州国際看護大学の研究者と共同で進めています。本研究に関する成果は以下をご参照ください。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19H04229/>

<https://kmkst.cica.jp/>

(2) 学びに関する指示/ニーズ/レベルに合った学習リソースによる最適化された学び (松葉)

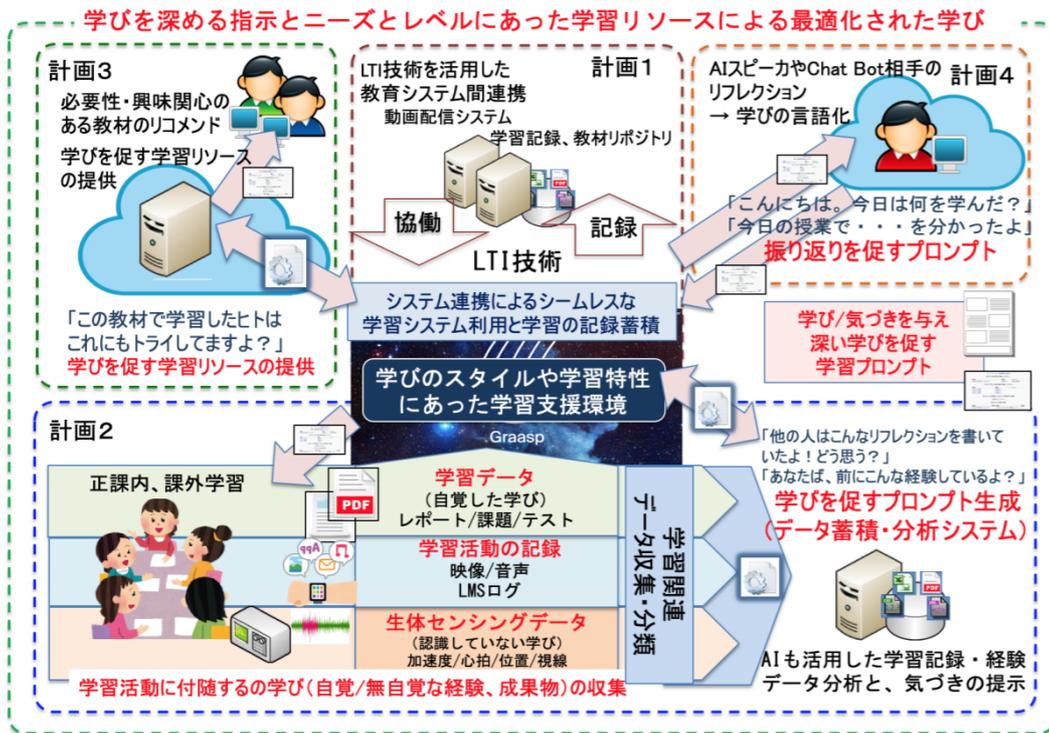
本研究では、国内組織がリードする教材開発・提供、教育実践研究を有機的に連携させ、学習者が生涯にわたり利用可能な次世代のICT学習支援環境(NGDLE: Next Generation Digital Learning Environment)の構築を目指しています(次ページ上側の図を参照)。尚、本研究は科学研究費助成事業の基盤(B)として採択されており、京都工芸繊維大学・大分大学の研究者と共同で進めています。本研究に関する成果は以下をご参照ください。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-20H04297/>

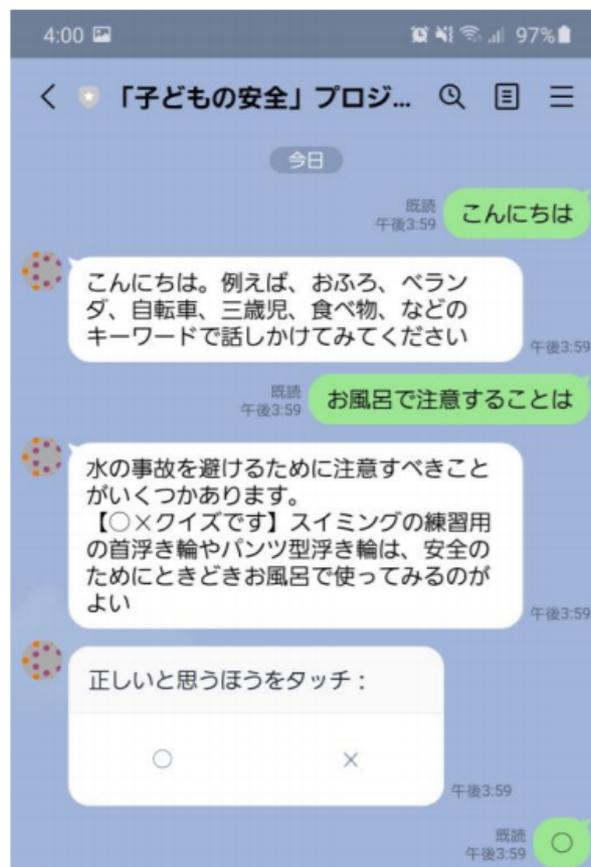
(3) 商業サービスとLMSを連携、ラーニングアナリティクスへ繋げる基盤構築 (長岡)

本研究では、Zoom、FacebookやTwitter、LINE、Evernote等のあらゆる商業サービスとLMSをシステム連携させることで、商業サービス上の学習活動とLMS上の学習活動を併せて成績評価したり、LRS上でラーニングアナリティクスできることを目指しています。2020年度はZoomミーティング上の出席情報や投票に関する情報がLMSであるMoodleの成績表示画面に表示され、学習活動履歴としてLRSへxAPI Statementとして抽出される機能「Zoom Log」を開発しました。尚、本研究は科学研究費助成事業の若手(B)として採択されています。本研究に関する成果は以下をご参照ください。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-16K16323/>



図：学習者が生涯にわたり利用可能な次世代のICT学習支援環境



図：LINEを通じてチャット形式で「子どもの安全」について学習できるプラットフォーム

各部門の説明：地域連携システム研究部門

地域連携システム研究部門では、はたらく世代(主に若年・中年層の社会人)、医療職・教員などの専門職のように、従来の生涯学習とは異なった層が興味をもち、かつ参加が可能なプログラム、および地域や企業における人材養成のニーズに対応した教育プログラムの開発・展開に関する研究を行っています。本部門では2020年度、以下のような研究プロジェクトに貢献しました。

(1) 放送大学：映像コンテンツ「筋トレアカデミア」の提供（都竹）

放送大学では、自分の身体（体重）を負荷にした筋力トレーニングの方法と、その効果について紹介した15分の番組を15回分作成し、BSにおいて定期的に配信しています。当初、想定していた対象層は中高年者でしたが、新型コロナウイルスで外出自粛を余儀なくされていた小中学生の体力低下を防ぐため、文部科学省のホームページなどで小中学生向けとしても広く周知しました。



放送大学 テレビ・ラジオ番組案内 ～生涯学習支援番組（放送授業以外）～

放送予定 番組の種類から選ぶ

気になるキーワードで検索

ホーム > その他 > 筋トレアカデミア 第1回 チェアスクワット

筋トレ アカデミア 第1回 チェアスクワット

講師 都竹茂樹 (熊本大学教授)

その他 筋トレ

図：放送大学「筋トレアカデミア」

(2) 公開講座のオンライン化およびオープンスクールの実施

例年、オンラインでの事前・事後学習と、対面で行うワークショップを組み合わせ実施していた公開講座ですが、新型コロナウイルスの影響で対面学習の実施が困難となったため、2020年度はワークショップのオンライン化を、本部門として試みました。

さらに、2020年12月6日には、例年、対面で行っていたオープンスクールをオンラインで実施しました。上記のオンライン化で得たノウハウを取り入れたワークショップ等を、今後も行っていきます。

eラーニング推進室

eラーニング推進室は、学習支援情報システム研究部門の研究成果を教育実践に応用し、本学の教育におけるICT活用を実質的に進め、教育の質向上につながることを目指しています。具体的には、eラーニング化の企画・推進、コンテンツの開発支援、eラーニング授業の設計支援、アプリケーション開発の企画実践、システムの管理運営その他ICT利用教育・メディア教育の実践支援等に関する業務を行っております。

2020年度は、本学の50科目のコンテンツ開発を行い、eラーニング化の啓蒙・普及活動として、新任・転任者研修会を4月と11月に実施し、それぞれ10名以上の参加がありました。またLMS講習会については、8回実施いたしました。

* 毎年開催しているeラーニング連続セミナーは、新型コロナの影響で中止となりました。



図：eラーニング推進室ウェブサイトのトップ画面

▶ [eラーニング推進室の詳細な年次報告はこちらをクリック](#)

FD活動支援室

本センターでは昨年度から運営組織として、新たに「FD活動支援室」（下図参照）を設置しました。

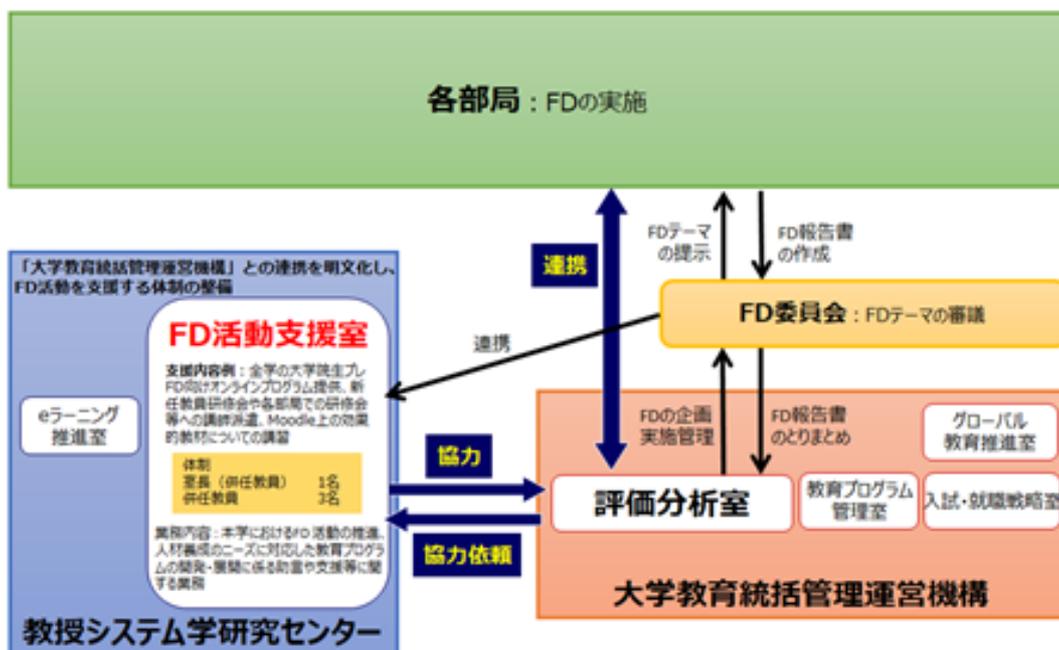
「FD活動支援室」を設置することで、大学教育統括管理運営機構が主管する本学のFD活動を支援する体制を整え、教育関係共同利用拠点の以下の5つの取組を中心として、本学のFD活動の方針に沿った支援を行っています。

1. インストラクショナル・デザイン公開講座
2. 「IDポータル」による情報提供並びに支援ツール・実力診断
3. 「教授システム学専攻公開科目」による学修機会の提供
4. FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣
5. 教育改善スキル修得オンラインプログラム

今年度は、以下を進めました。

- 大学院生への（努力義務化）プレFDとして「教育改善スキル修得オンラインプログラム」を全学に提供する（学内者は受講料無料）。
- 新任・転任教員等教育研修会への講師派遣を継続し、各部局での研修会・検討会への講師派遣を行う。
- 学生の学修支援につながるMoodle上での効果的な教材作成方法の実例を取り上げた講演会を、初級編から上級編まで各種実施するとともに、オンラインでも同内容をいつでも受講できるようにする。
- 「熊大版遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」において、オンライン授業の評価方法等について情報を提供しました。

教授システム学研究センターFD活動支援室の設置について



図：教授システム学研究センターFD活動支援室と熊本大学内他部局の関係

教育関係共同利用拠点の5つの取り組み

本センターは、教育関係共同利用拠点として認定されています。

拠点名称：教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点

共同利用分野：大学の職員（教員を含む）の組織的な研修等の実施機関

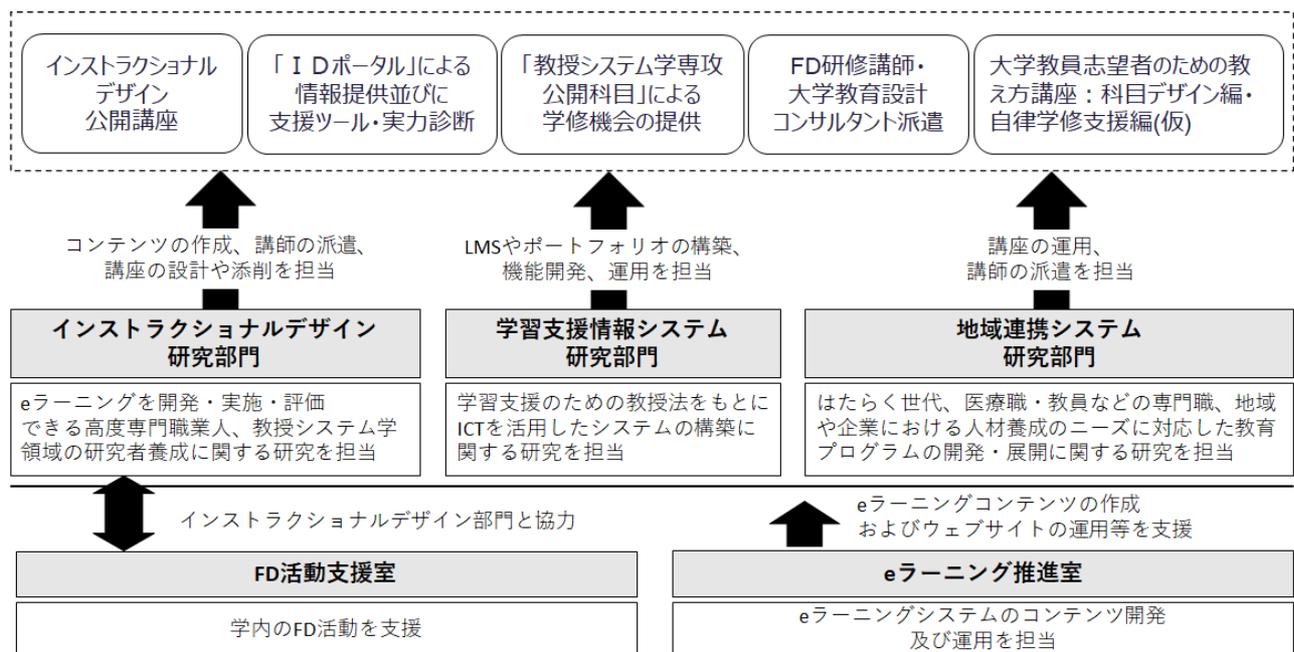
期間：令和3年度から4年度（平成30年度-32年度の認定期間が延長）

教育関係共同利用拠点として、教授する力のうちの授業実践力（デリバリ）に対するノウハウを身に付けることに留まらず、デリバリの基盤となる授業設計力（デザイン）あるいはカリキュラム設計力を身に付けるための授業設計、教育評価、授業改善のための分析手法、改善手法等を体系化したオンライン教材、ワークショップ等の開発・提供といった活動を行っています。

<5つの取り組み>

1. インストラクショナル・デザイン公開講座
2. 「IDポータル」による情報提供並びに支援ツール・実力診断
3. 「教授システム学専攻公開科目」による学修機会の提供
4. FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣
5. 大学教員志望者のための教え方講座：科目デザイン編・自律学修支援編(仮)

上記5つの取り組みは、本センター内の各部門が協力し、運営しています。



共同利用拠点事業①

公開講座

本センターでは、インストラクショナル・デザインに関する
公開講座を各地で開催しています。

本年度の取り組みの概要

教育関係者、企業における研修・教育担当者、医療関係者、日本語教師等、教育・研修を担当する幅広い層を対象に、インストラクショナル・デザイン（以下、「ID」）を紹介・学ぶ機会を提供する公開講座を2011年より実施しています。講座は、IDの基礎用語10個を学び、ARCSモデルの活用事例をワークで学ぶ入門編、および入門編で学んだID基礎用語をベースに、参加者同士のワークを中心に参加者自身の事例を改善し、IDを使う練習を徹底的に行う応用編から構成されています。

いずれの講座でも、事前事後学習ではMoodleを使用しております。例年、東京、名古屋、大阪、福岡、熊本の5会場、8回実施していましたが、今年度はCOVID-19の影響で対面のワークショップをZoomに置き換え、事前事後学習は例年通りMoodleを使用して実施しました（入門編5回、応用編3回）。

◆入門編◆

講師：都竹茂樹、平岡齊士、天野慧

学習目標：

- (1) IDの基礎用語10個がどのような場面でどのように活用できるかを例示できる（知的技能）
- (2) ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる（知的技能）

概要：

eラーニングでの自己学習や受講者同士のワークを通じてID10の基礎用語を学んでいきます。また、Zoomを使用したワークショップでは、10個の基礎用語の中からARCSモデルに絞り、講師が提示する教育事例に対する改善策の検討を受講者同士ワークで行っていきます。IDの道具をどのような場面でどのように活用できるか提示できるようになることを入門編の目標としています。

◆応用編◆

講師：鈴木克明

学習目標：

- ・IDの基礎用語10個のうち1つ以上を応用して、自分の教育事例の改善案を提示できる（知的技能）

概要：

入門編で学んだID基礎用語をベースに、応用編では参加者同士のワークを中心に構成し、IDを使う練習を徹底的に行います。みなさんが取り組まれている教育事例について、IDを用いて改善案を提示できることを応用編の目標としています。

* 昨年度までに入門編の事後テストに合格し修了認定された方や、他の場でIDを学習し入門編の学習目標を達成している方等は、応用編から受講可能です。ただし、その際には、別途ご案内する応用編の前提課題へ取り組み、合格基準を満たす必要があります。

公開講座の他事業への展開

また、今年度は公開講座の枠組みを活用し、「**COIL : Collaborative Online International Learning**」に参加する大学の教職員を対象とした以下の出張研修等を行い、積極的にFD等に取り組む大学における共通言語づくりを支援しました。

日時：2020年12月12日・19日

概要：

関西大学国際部グローバル教育イノベーション推進機構（IIGE）主催の「COIL/VEのためのインストラクショナルデザイン」に都竹・平岡が講師として参加。公開講座で培ったノウハウを活かし、事前課題－対面研修－事後課題の3段階で実施。

対面研修ではGoogleDocumentとLMSを用いて質問を収集し、同期・非同期の両方で質問に回答しました。この形式で行うことで、事前課題－対面研修－事後課題のどの段階においても受講者からの質疑にスムーズに対応できました。

各地会場の参加者数

【入門編】 全受講人数：116名

各回共通：募集人数：40名 開講時間：10:00～16:30 時間数：5.5時間

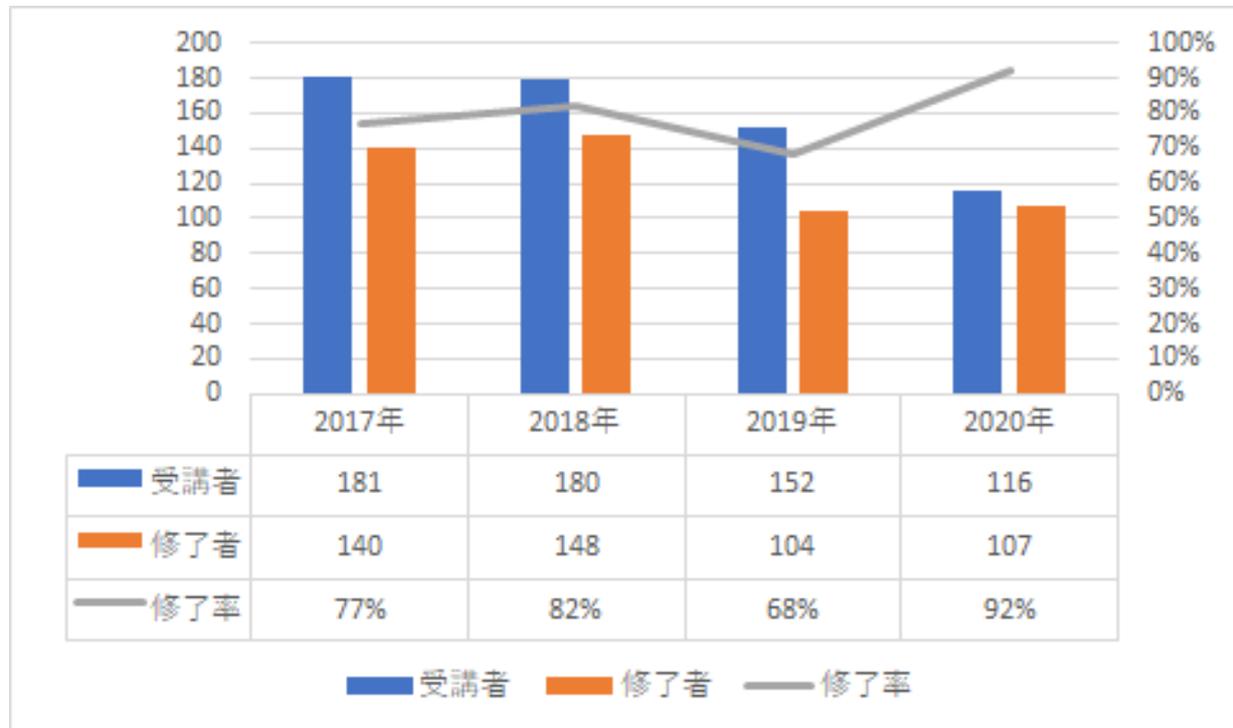
No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	入門編	10/31	Zoom	15
2	入門編	11/3	Zoom	16
3	入門編	11/7	Zoom	29
4	入門編	11/15	Zoom	30
5	入門編	11/28	Zoom	26

【応用編】 全受講人数：64名

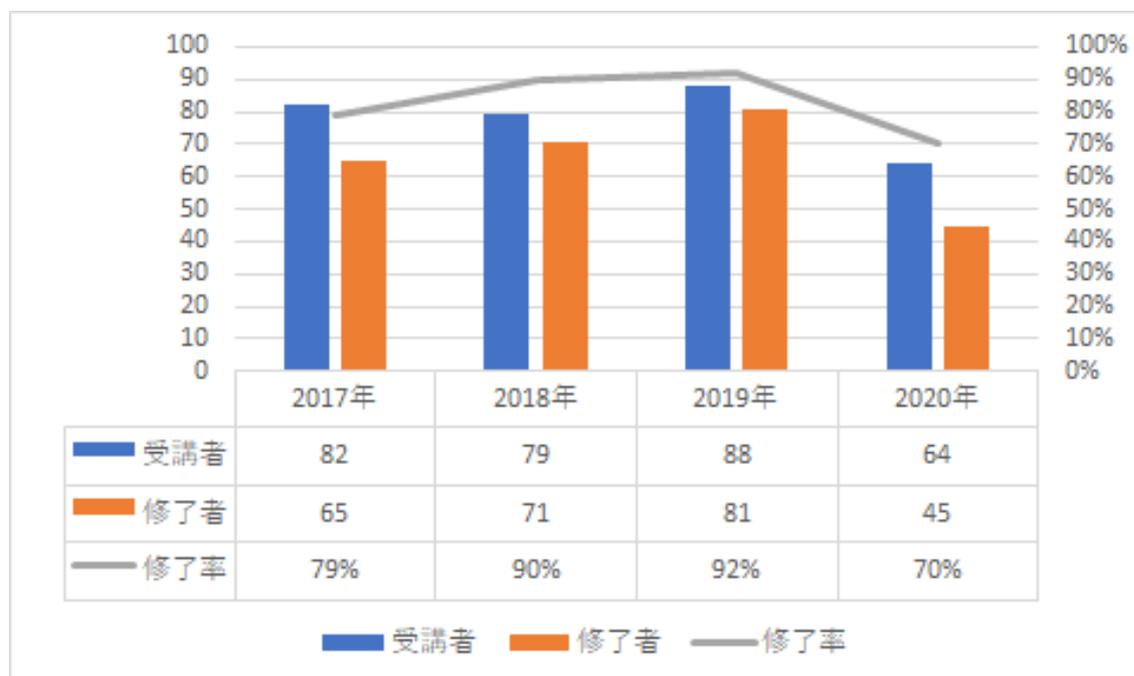
各回共通：募集人数：40名 開講時間：10:00～16:30 時間数：5.5時間

No	講座名	開講日	会場名	受講人数
1	応用編	1/9	Zoom	23
2	応用編	1/10	Zoom	16
3	応用編	1/24	Zoom	25

入門編・応用編修了率の推移（レベル2）



図：入門編受講者数に対する修了者数の推移



図：応用編受講者数に対する修了者数の推移

プログラム（入門編）の内容

事前学習

⇒

対面学習当日：

- ・ オープニング
- ・ 質問への回答コーナー その1
(休憩)
- ・ 質問への回答コーナー その2
- ・ 受講者の交流タイム
(ランチ休憩)
- ・ ARCS事例紹介1
(休憩)
- ・ ARCSの事例紹介2
(休憩)
- ・ 事後課題について
- ・ 振り返り
- ・ 全体質疑&発展学習のご案内
- ・ 受講証書授与
- ・ 事後アンケート
- ・ 応用編参加者の方へ

⇒

事後学習



デジタルバッジ
2020年度 入門編版

プログラム（応用編）の内容

事前学習

⇒

対面学習当日：

- ・ オープニング
- ・ グループで事前課題を共有する
- ・ ペアリング1
- ・ ペアで改善案を議論する
(休憩)
- ・ グループメンバーにペアワークの結果を伝える1
 - ・ 鈴木先生への質問を考える1
 - ・ 鈴木先生に質問しよう1
(ランチ休憩)
- ・ ペアリング2
- ・ ペアで改善案を議論する2
- ・ 席移動
- ・ グループにペアワークの結果を伝える2
(休憩)
- ・ 鈴木先生への質問を考える2
- ・ 鈴木先生に質問しよう2
- ・ 全体質疑、総括
- ・ クロージング、受講証書授与

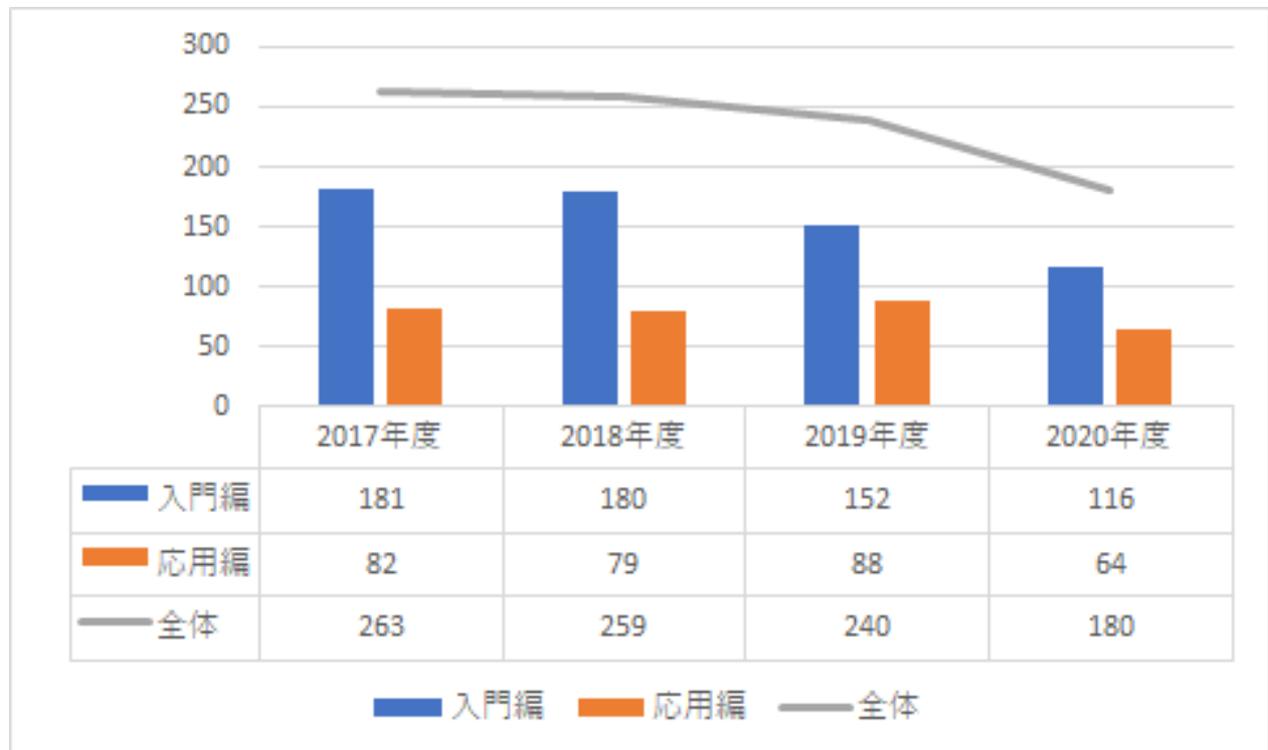
⇒

事後学習



デジタルバッジ
2020年度 応用編版

入門編・応用編参加者数推移



図：受講者数推移（2017年度から2020年度）

受講後アンケートの結果（レベル2：主観的評価）

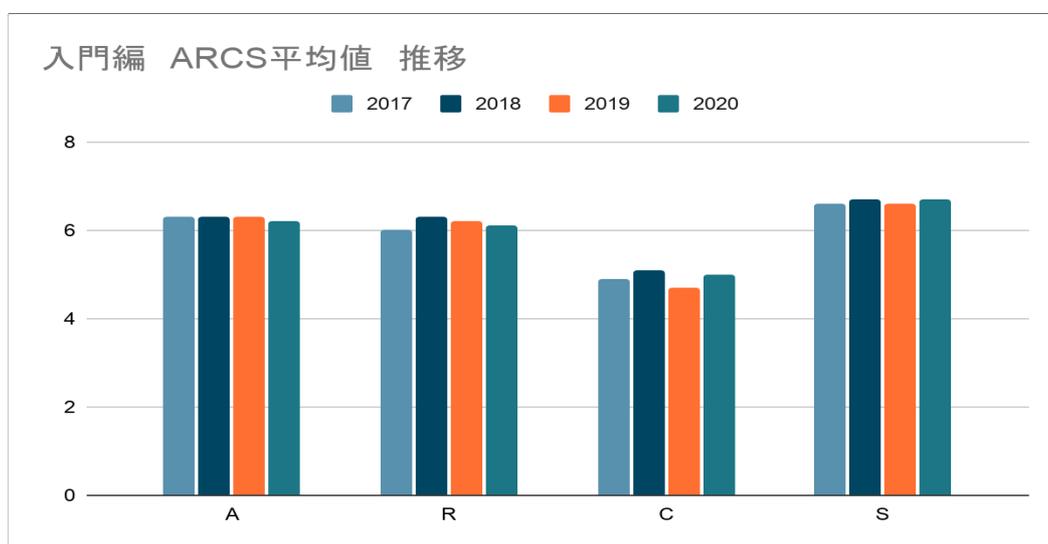
2020年度の入門編・応用編受講者に対する受講後アンケート（入門編の参加者116名のうち91名（受講者のうち78%）、応用編の参加者64名のうち57名（受講者のうち89%）では、講座に対する印象をARCSモデルに基づき測定し、講座で掲げた学習目標を達成できたかについても、入門編と応用編別に回答を求めました。

1) 入門編・応用編についての印象

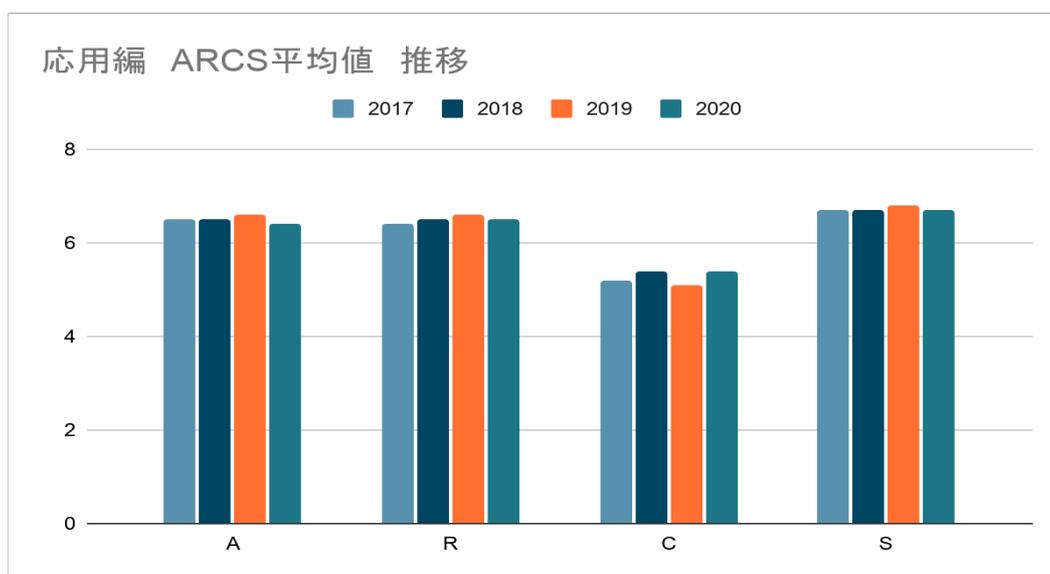
講座の印象について、ARCS別に7段階評価で測定し、全体回答の平均値が2017年度から2020年度までの間でどのように推移しているのか、調査しました。

その結果、各年度とも、入門編、応用編ともに、C以外の値が、6以上を示し、Cに関しても、入門編では4以上、応用編では5以上の数値を示し、講座への評価が高いことが確認できました。

以下の図で、講座への印象に関する回答結果を年度ごとに提示しました。



図：講座（入門編）への印象に関するARCS平均値の推移（2017年度から2020年度）

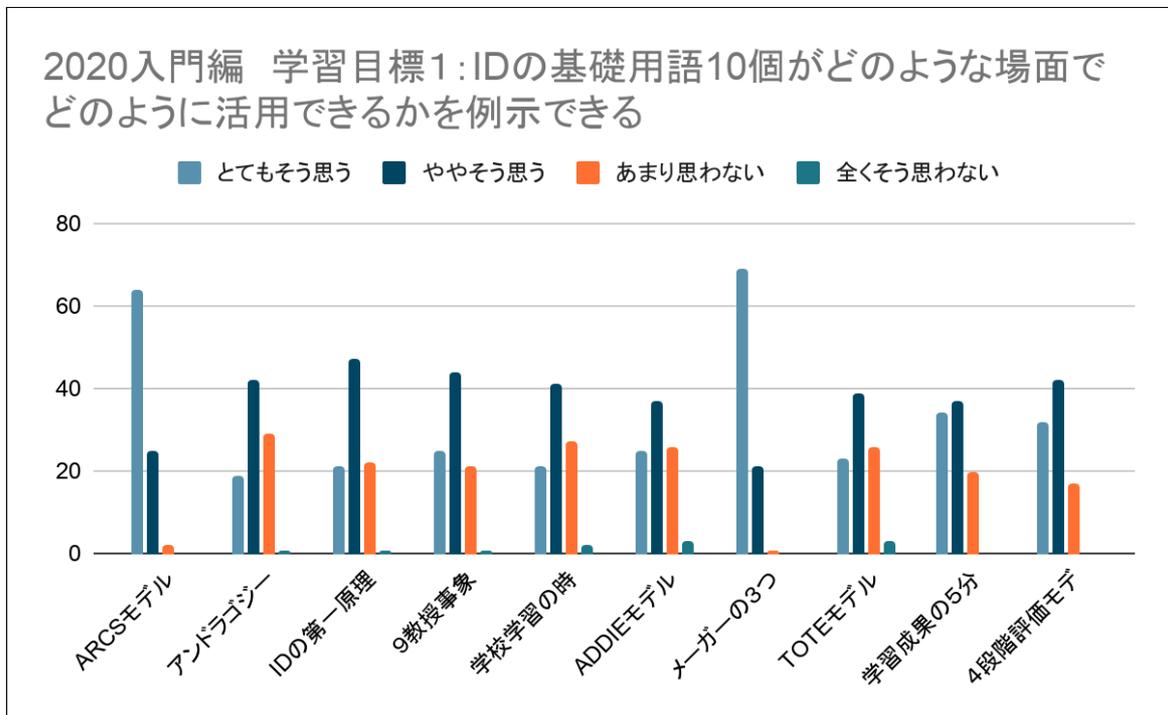


図：講座（応用編）への印象に関するARCS平均値の推移（2017年度から2020年度）

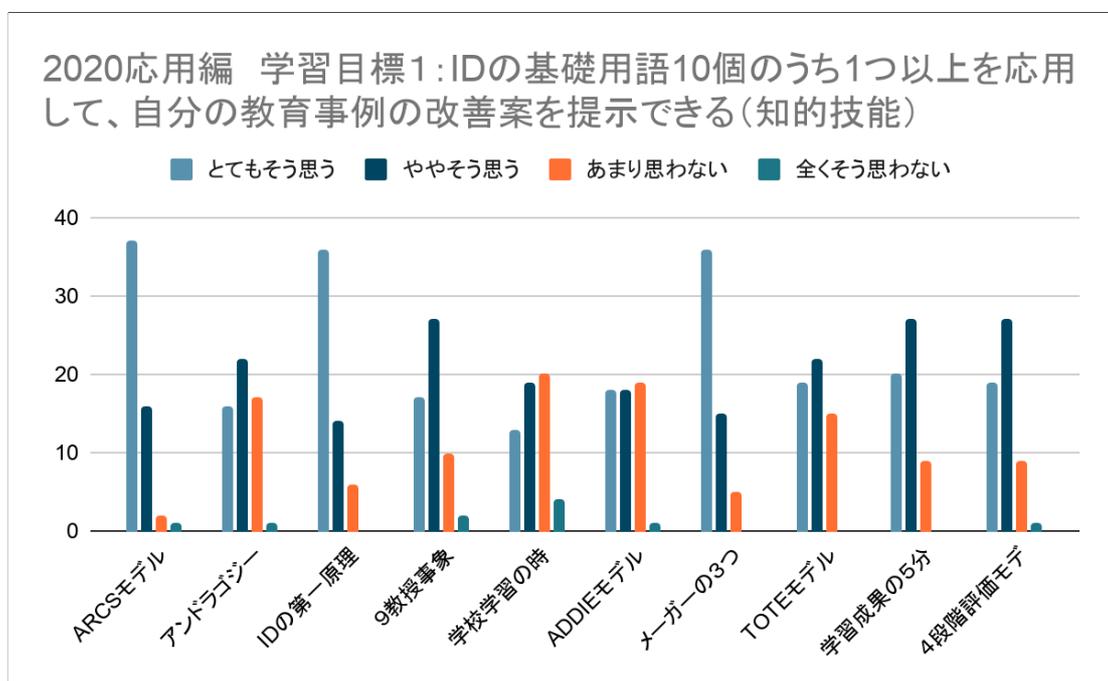
2) 入門編・応用編での学習目標達成状況について

入門編で掲げた学習目標1の達成について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」が高い値を示し、学習目標2（ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる）の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の回答が高い値を示しました。

また、応用編で掲げた学習目標の達成についても、「とてもそう思う」、「ややそう思う」が高い値を示し、入門編と応用編での学習目標達成に関し、「あまりそう思わない」、「そう思わない」が過半数を越えている項目はありませんでした。以下に、入門編学習目標1の到達状況と、応用編学習目標1の到達状況に関する回答結果を提示しました。



図：入門編学習目標1の到達状況（2020年度）



図：応用編学習目標1の到達状況（2020年度）

参加者の声（レベル1）

応用編へ参加された方からいただいたコメントの一部をご紹介します。

<プログラム設計・運営方法に関すること>

- 大変スムーズな進行でとても安心して受講することができました。
- 午前、午後と同じセッションを繰り返す形だったので、構成が分かりやすかった。また、鈴木先生のアドバイスが非常に分かりやすかった。
- いろいろな質問、多様な人の質問、回答などに学ぶことが多かったため主体的に取り組めた。
- （良かった点として）土日に開催されたこと。
- 最後少し疲れました。もう少し全体の時間が短くてもよいのかもしれないです。真剣に取り組んだ証拠かもしれませんが。
- 事前にお知らせが来て忘れ防止に良かったが、受講日によってレポート提出日が異なっていたので、提出期限の数日前にリマインドのお知らせが来るともっとありがたいと思いました（自分の意識の問題ですが）。
- 同じグループやペアになった方でもう少しお話を聞きたい方や、実践後どう変わったかなど今後の展開を伺いたい方がいらっしゃいました。教室対面であれば、休み時間などに連絡先の交換ができたかと思うのですが、今回はオンラインでそのような時間もなく、Zoomの設定も参加者同士の個人チャットができないようになっていたので、これっきりになってしまいました。例えば、Facebookの非公開グループを作って希望者はそこに任意で参加するなどすれば、そこでもう少しカジュアルに実践報告がしあえるかもしれないと思いました。
- 企画・運営ありがとうございました。基本編も初日を受講しましたが、運営が非常に洗練されてきていて感動しました。オンライン研修の参考にさせていただきます。今後ともよろしくお願いたします！
- 研修設計の分析・改善ワークシートを提出する際に、鈴木先生からフィードバックを頂けることが事前に分かっていたら、特にコメントを頂きたい点などを明確に記載したかったと思いました。

<ペアワーク・グループワークに関すること>

- 個人ワーク、ペアワーク、グループワークを行き来して、内省の時間が十分に取れました。
- 先に鈴木先生への質問を、各々考えておき、グループワーク時にブラッシュアップするようにすると時間短縮になるかも。
- 午後の1回目の鈴木先生の回答でほぼ解決したため、2回目の質問を考えるところでは質問探しに苦慮した。鈴木先生の回答で得られたことについての2人のディスカッションを通しての学びでもいいのではないかと思った。
- ペアワークとグループワークをうまく活用できたと思います。段階的に自分の教育設計の改善案が出てきたので、とてもありがたかったです。
- 入門編と異なり、ペアワークがあったため、内向的な自分にできるのかと不安があったが、逆に人数が少ないことで話しやすかった。またグループワークでペアワークの結果を報告することで再度自分自身も理解が深まるように感じた。
- ペアとグループで話し合う時間でいろいろアドバイスももらって、自分もできそうだと思います。
- グループワークの他、ペアワークがあったこと。これまでオンライン研修には何度も参加してきたが、ペアワークは初めてだったので、最初は緊張したが、非常に深い話ができる。
- グループワーク、ペアワークの時間として、十分な時間がとられていたこと。ペアではしっかりとお互いの問題点について話すことができた。
- （良かった点として）グループワークとペアワークのメンバーが違ったこと。

<課題の添削・フィードバックに関すること>

- 鈴木先生からいただいたコメントについてもとても嬉しく感じました。（教員が学生にコメントをすることは大事なんだなと実感しました。）

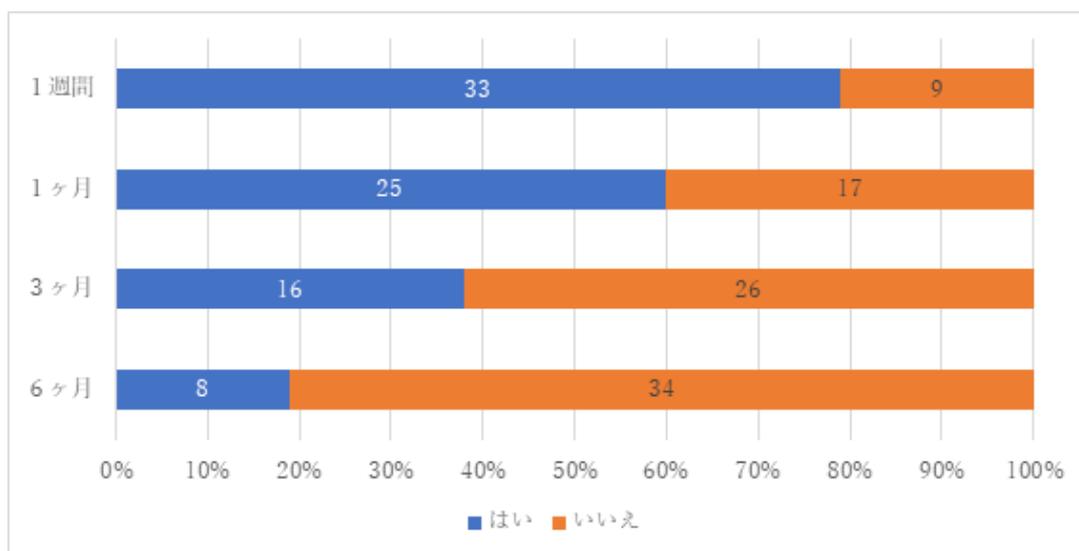
- (良かった点として) 入門編に引き続き、また新たな講師の方(鈴木先生)から全員に事前課題のフィードバックをもらったこと。小さな積み重ねも評価してもらうことで学習者の意欲向上につながると感じた。
- (良かった点として) 事前課題に対して、鈴木先生からフィードバックをもらったこと。自分自身も学生への課題にFBを行っているが、非常に時間も労力もかかるので、やめたくなるが、反対にフィードバックを受ける立場になってみると、やはりフィードバックは嬉しい。
- 課題などに対する迅速なフィードバックには感嘆しましたし、その日のうちに、そのフィードバックを踏まえてさらに議論が進むことは有難かった。
- 他者の成果物にフィードバックをすることはお互いの学びになるのでやりがいがあった

6 か月後追跡アンケートの結果（レベル3）

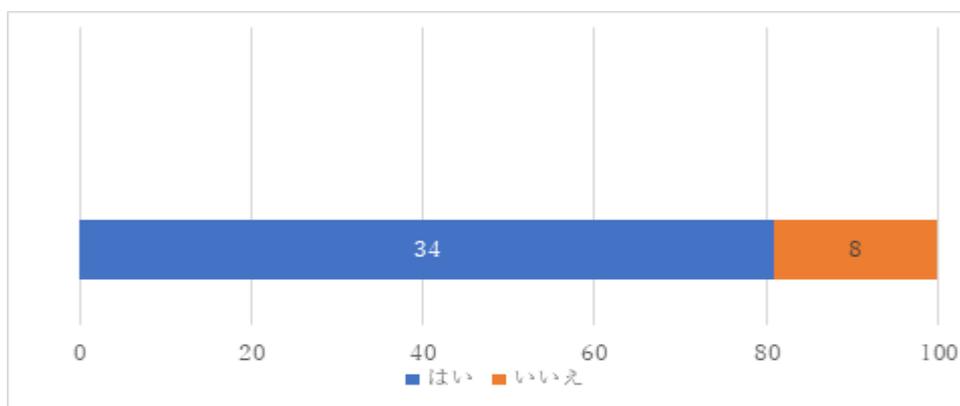
インストラクショナルデザイン公開講座 応用編（2019年度）の6ヶ月後追跡調査アンケート（デジタルバッジ取得者67名のうち42名(バッジ取得者のうち63%)）では、講座の内容をどの程度覚えているか(記憶度)、また受講後の業務にどの程度役立っているか(有益度)についての回答を求めました。記憶度では、ARCSモデル、メーガ-の3つの質問、IDの第一原理が高く、有益度では、ARCSモデル、IDの第一原理、メーガ-の3つの質問が高いという結果でした。また、記憶度・有益度ともに、「覚えていない」「役にたっていない」が過半数を越えている項目はありませんでした。

<6か月後追跡調査結果概要（2020年8月実施分）>

最終レポートで作成したアクションプランを計画通り実行したか回答を求めた結果、1週間、1か月の計画では、6割以上の受講者が具体的なアクションを実行していたが、期間を経るごとに取り組んだ方の割合が徐々に減り、6ヶ月では2割以下となっていました。行動に移せなかった理由を見てみると、「コロナで予定が変更になった」、「コロナで研修自体が中止になった」のように、コロナ禍の影響が多数理由として挙げられていました。また、公開講座で学んだことをもとに、自分が従事する教育事例の改善に取り組んだか回答を求めた結果、80%以上の受講者が「はい」と回答しました。以下、アクションプランの実行状況とIDを活用した教育改善への取組状況、そして、具体的にどのような取り組みをされて、どのような成果を収めたのか、その一部を紹介します。



図：アクションプランの実行状況（N=42）



図：IDを活用した教育改善への取組状況（N=42）

表：6ヶ月追跡調査によって報告された取り組み事例とその成果

授業・研修の設計や実践がスムーズだった or 授業・研修の設計に役に立った	10件
<ul style="list-style-type: none"> ・事前課題の修正に必要なポイントを自ら学び取り、修正することができるようになった。 ・計画通りには進まなかったがマニュアルと技術チェックリストを再修正したものを発信することで助産師自身の技術の振り返りになった。 ・集合研修主体だった昨年に比べ、成果物（個人、グループ）の量が増え、質も上がったと感じられたこと。1回目のテーマの実践度は、2回目はまだのためはっきりとした手応えは得られていない。しかし、研修自体の反応は、集合と大きく変わらないように感じられたこと。 ・目標の明確化により、特に指導者側のプレが少なくなった。 ・Googleフォームを用いた自己学習ツールはほかの学年の学生さんにも使いまわして大活躍している。 ・コロナの影響で実習中止となり、代替授業におけるルーブリック評価をやってみて、改善等参考になった。 ・自分が授業を考える際に、必要な視点について学べたので、今でも授業を考えるときにIDの教科書を見ている。学習目標を考えて、それに合わせて授業の組み立てや構成を考えるようになった。評価方法についても、ただ感想を書くなどにせず目標に合わせた評価、もしくは学習目標を立てることができるようになった。 ・コロナで前年度と比較して大幅な授業計画の変更があり、一概に比較ができない。しかし、その中でも学生に到達目標を意識させながら一方的な授業にはならないようにできたことが一番の成果ではある。 ・テスト実施後にふりかえったあとに、どの項目について理解が足りていないかが明確に示せるようになった。 ・毎回の授業案の作成がスムーズにできた。 	
授業・研修におけるアンケート評価結果の向上	8件
<ul style="list-style-type: none"> ・学生から、授業に対する考え方が変わり、教えてもらうではなく、何が自分に必要かをしっかりを見つけることができ、授業のポイントをいち早くつかめ、的確に自分の技術にすることができたという答えが多くあった。 ・授業終了後の学生のコメントの中に、「学習目標がわかりやすく、何を学習したらよいかかわかった」という言葉があった。 ・研修後のアンケートの結果において、「自身の指導の振り返りができた」「グループワークが楽しかった」という意見を聞くことが出来て嬉しかった。 ・動画講義を導入したことで、「自分の好きな時間に閲覧ができること、分からないことは何度も見直すことができて良かった」という受講者の声を多く聞いた。受講者が所属する部署の管理者も、どのような研修が行われているのか、動画を見て知ることができたという高評価を得た。そして、レポートへのフィードバックについては、「なぜ合格したのかがわかったし、褒められるとモチベーションが上がる」という声も聞かれた。 ・学んだ内容を実際実践することで、効果を実感したという感想が多かった。講義をしない研修をしても、研修の評価は高かった。 ・授業に参加した際に「真剣に考えた」「実習のように緊張した」や、一部施設実習を終えた学生からは「学内でやっていてよかった」という言葉をもらった。 ・「分かり易い」「授業にムダが無い」という感想をもらった。 ・学生から、事前の小テストをして授業を受けるので、よく理解できるとコメントをもらった。 	
受講者の行動・態度の変容・学力や技術力等のアップ	7件
<ul style="list-style-type: none"> ・援助方法など具体的な質問が増えた。さらに、今回は、COVID-19の影響で学内演習が 	

<p>できなかったが、演習をしたいという積極的な意見が聞かれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に比べて学生の学ぶ姿勢が変わり、今年度は135分、および90分×5コマの授業であったが、居眠りする学生を一人も出さなかった。またすべての学生が発言できた。事前テストと事後テストを比較すると70割程度の学生に点数の改善があった。習目標を明確化したことで、記述問題では狙っていた内容を回答できている学生が増えた。 ・中間で行った授業方法へのアンケートで「楽しみながら答え探しができる」とか「実際に使えそう」「この授業はやりがいがある」というコメントをもらった。 ・終了時間がすぎても話が止まらず、楽しんでいる様子が感じられる。以前は発言の内容がテーマとずれて個人的なことになってしまいがちだったのがなくなった。困りごとに対して参加者同士で適切な提言が出されることも多くなった。再開後知的レベルの高い者のほうが復活しているのかもしれない。 ・「もっとこの科目の内容について知りたい」という学生が現れた。 ・ペアワークで活気が見られ、終了アンケートで好評/前向きなコメントが約3割増えた。 ・受講者の研修で学んだスキルを現場で発揮していることが、受講者のみならず、上長からのインタビューでも確認された。これまで、研修で学んだ事が活かされていないジレンマを感じていたが、改善に繋がっている。 	
手応えは得られていない	4件
<ul style="list-style-type: none"> ・学生の学修成果としての手応えは得られなかった。 ・3年計画の1年目であり、まだ手応えは得られていない。 ・研修後は、研修の中に取り込んだARCSの話を新人教育の時に視点として取り入れることが増えるなど、昨年時の研修後に比べて日常の中で目にするようになった。しかし、計画を十分に継続できているかどうかはまだ効果判定ができていない。 ・テストの点数が伸びない生徒もあり、それだけでは身につかないことも分かった。 	
組織や周りからの共感・支援	3件
<ul style="list-style-type: none"> ・中1から高3までの6年間の教育を通じ、どこを目指しどう達成していくかについて学校首脳部の共感を得た。 ・後輩がフライトスタッフで撮りためた動画に興味を持ち、後輩自ら動画を視聴する様になった。後輩自ら学習することに興味を持ち、学習する環境の提供はできたかと思っている。 ・実際、研修の内容を文章にし言葉で説明をしても、「大変そう」と思われているのか、飛びつく感じは全くなかった。そのため、実際Googleで作成したテストをスマートフォンで見せたところ、少し関心を持ってもらえた。管理者からは、集合研修ができない今、このような研修ができるといいねと、肯定的な言葉が聞かれた。時期を見計らって、研修を行いたいと思う。 	
実施中	2件
<ul style="list-style-type: none"> ・実施中である ・現在、研修1か月目が過ぎており、1か月目の行動変容のチェックの時期である。継続できている人もいれば、立ち止まってしまっている人もいるが、振り返ることで自分が行動変容に対するどのような目標を掲げていたか思い出すきっかけになっており、6か月後のフォローを待ちたい。 	
実施していない・できていない	3件
<ul style="list-style-type: none"> ・後期授業のため実践はしていない。 ・教材は一つしかできていない状態であり、作成した胸腔ドレーン症例を現場で経験できた後輩（学習者）はいないので教材自体の評価ができていない。 ・新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、研修の実施ができないため、改善効果はわからない。 	

その他	2件
<ul style="list-style-type: none">・意外とeラーニングでも実施できることは多々あると感じる。一方でモチベーション維持や自分自身でスケジュール管理させる難しさを学んだ。スケジュール管理にも足場がけなどが必要かと感じるがアイデアはこれから検討します。・講師による学生の満足度のばらつきが予想通り大きいことが分かった。	

共同利用拠点事業②

IDポータル

本大学ではインストラクショナル・デザインに関するイベントや文献等の情報を収集するためのサイト「IDポータル」を運営しています。

本年度の取り組みの概要

本センターでは、IDに関する情報収集のためのウェブサイト「IDポータル」を運用しています。IDポータルでは、IDと関連する学会やワークショップ等のイベント、IDに基づいた教育実践をまとめた論文情報、教育実践のお悩みをIDに基づいて解決するQandA等を提供しています。

IDポータルのプラットフォーム老朽化に伴う不具合の生じる頻度が上がってきたことから、本年度は、IDポータルのプラットフォームとして利用しているCMS（Contents Management System）を長年利用していた「WordPress」から、国産のCMSである「Shirasagi」へ変更しました（**2020年10月に変更**）。

また、これまでに構築してきたアクセス数を分析するプラットフォームを活用して、アクセス数の多いコンテンツを調査・分析し、プラットフォームおよびコンテンツ改良に向けた検討を進めています。

さらに、「IDについて学びたい・知りたいという人にとって入口（ドア）となるウェブサイトでありたい」という新たなプラットフォームでより多くの方に本サイトを利用いただけるよう、次年度以降も拡張を進めたいと思います。

The screenshot shows the ID Portal website homepage. At the top, there is a navigation bar with the site logo 'IDポータル' and a search box. Below the navigation bar, there is a main content area with a yellow header that says 'IDポータルへようこそ！'. The main content area is divided into two columns. The left column is titled '直近イベント情報' and lists several events with dates and titles. The right column is titled 'リンク' and lists several links to related websites and resources.

このサイトは、ID (Instructional Design: インストラクショナル・デザイン) の学習者がIDについて学ぶことを支援するために構築しました。初めての方は、[本サイトについて](#)をお読みください。

直近イベント情報

- 2020年10月6日(火)～2021年3月23日(火)
[日本医療教授システム学会「医療ISD実践コース」開講](#)
- 2021年3月6日(土)～2021年3月7日(日)
[日本教育工学会 2021年春期全国大会@オンライン](#)
- 2021年3月13日(土)～2021年3月14日(日)
[情報処理学会「159回研究発表会」@千里金蘭大学](#)
- 2021年3月15日(月)
[人工知能学会第91回先進的学習科学と工学研究会\(SIG-ALST\)@オンライン](#)
- 2021年3月20日(土)
[教育システム情報学会2020年度特集「Society5.0に向けたオンライン学習およびAI・数理・データサイエンスと人材育成支援に関わる教育システム」@オンライン](#)
- 2021年3月21日(日)
[教育システム情報学会2020年次第6回研究会「Society5.0時代の教育システムとAI・数理・データサイエンス」@オンライン](#)

リンク

- 鈴木克明教授 Webサイト**
IDに関する著書や経歴、直近のスケジュールを掲載しています。
- 都竹茂樹教授Webページ**
経歴や連絡先などの情報がありません。
- Yoshi Lab**
合田美子准教授の経歴や最新情報があります。
- 教授システム学専攻同窓会**

図：国産CMSである「Shirasagi」を利用した新しいIDポータルウェブサイト

コンテンツ一覧

IDポータルは、教授システム学専攻の同窓生をはじめ、多くの関係者にご協力いただきながら、以下のコンテンツを提供しています。

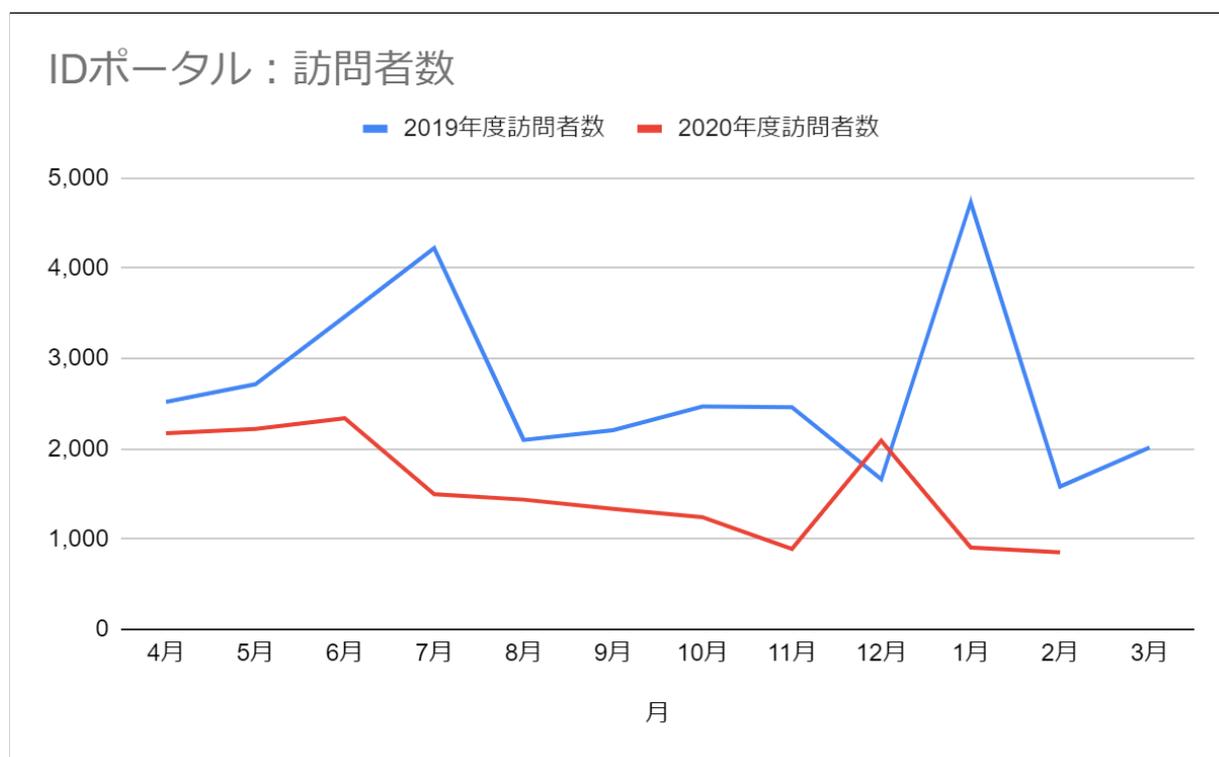
コンテンツカテゴリ名	内容
イベント	IDに基づいた研究・実践が発表される学会・研究会（日本教育工学会、教授システム情報学会、ICoME等）や、IDについて学習できるワークショップ（熊本大学公開講座等）について、随時、配信しています。
ID関連文献等	IDに基づいた研究・実践についてまとめた論文や学会報告を随時、掲載しています。
IDマガジン	IDと関連するブックレビューや熊本大学教授システム学専攻主催の「まなばナイト」等のイベントのレポートを事前登録者に対して配信、サイトへ掲載しています。尚、IDマガジンは、熊本大学教授システム学専攻の同窓生有志で構成される「IDマガジン編集委員会」によって長年、企画・運用されています。
お悩み解決QandA	eラーニング・授業・研修をデザインする際に出てくるありがちなお悩みを レイヤーモデル（eラーニング、授業、研修等の質を5つの段階に分けて整理したもの）の5つのレベルごとに分類しています。「学習目標の種類によって、どんな学び方、教え方をすれば効率的か」や「知識やスキルではなく、望ましい態度を教えたい」等について、IDの観点からの解決策や関連するリソースを提供しています。
実力チェック	教授システム学専攻必修科目「インストラクショナル・デザインI」を題材に、架空の教材企画書が提示され、学習目標や事前/事後テストの内容、前提条件等の各項目の適切性を評価する活動を通じて、授業設計に関する知識・スキルを身につけているか判断できます。
作業支援ツール	教授システム学研究センター長兼教授システム学専攻長である鈴木克明教授が執筆し、多くの人に利用されている以下の4つの書籍で紹介されている授業設計のための作業を支援するための機能・資料が提供されています。 1. 教材設計マニュアル 2. 授業設計マニュアル 3. 研修設計マニュアル 4. 学習設計マニュアル

サイトおよび各コンテンツへのアクセス数

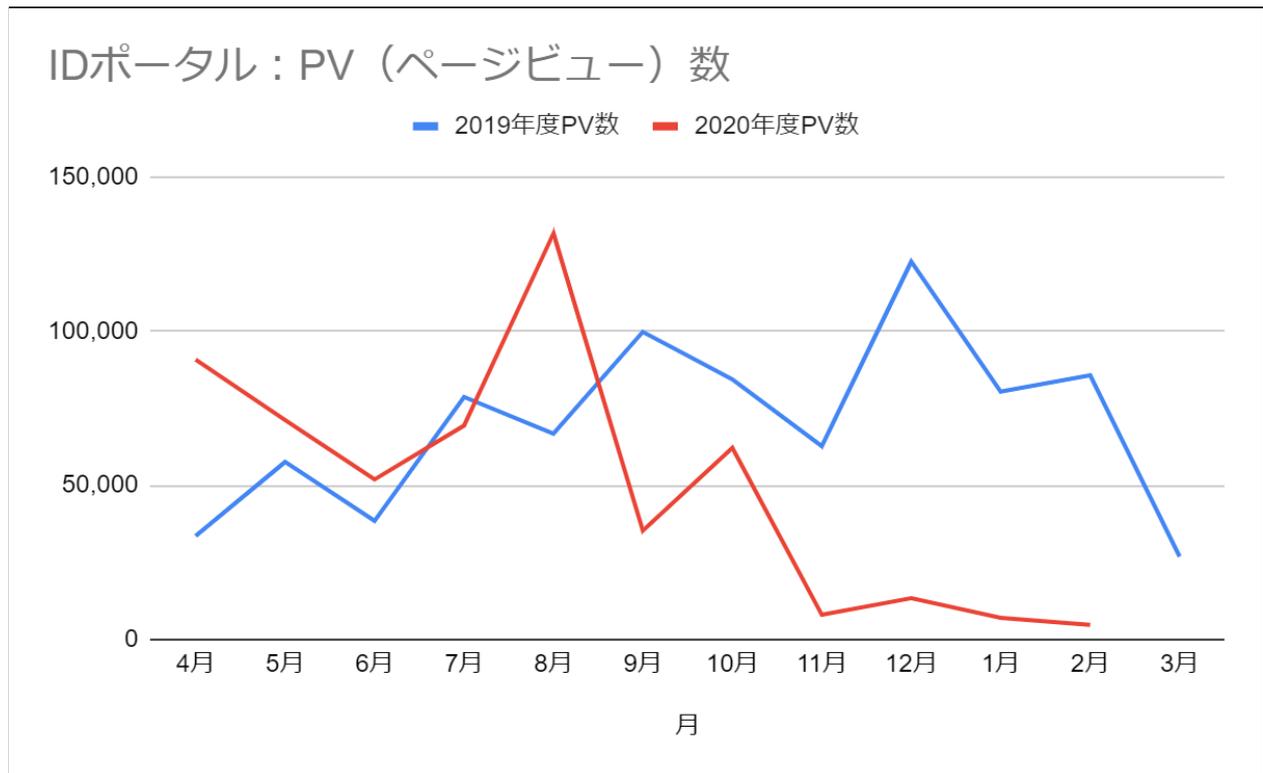
以下に示すように、IDポータルは日々、多くの方にアクセス・利用されています。

表：月毎のサイトへのアクセス数

月	訪問者数 (IPアドレス)		閲覧された回数 (PV：ページビュー数)	
	2019年度	2020年度	2019年度	2020年度
4月	2,519	2,173	33,603	90,740
5月	2,715	2,221	57,566	71,174
6月	3,464	2,338	38,470	51,895
7月	4,223	1,496	78,605	69,362
8月	2,097	1,437	66,706	131,682
9月	2,206	1,334	99,731	35,283
10月	2,468	1,243	84,335	62,159
11月	2,462	892	62,705	8,056
12月	1,665	2,088	122,517	13,367
1月	4,729	905	80,361	7018
2月	1,582	853	85,650	4,788
3月	2,014	—	26,860	—
合計	32,114	16,980	837,109	545,524



図：IDポータルに対する訪問者数



図：IDポータルに対するPV（ページビュー）数

共同利用拠点事業③

公開科目

本センターでは、教授システム学専攻の大学院科目の一部をウェブサイトで公開し、一般の方々にも、広く学修の機会を提供しています。

本年度の取り組みの概要

本年度は、経営学特論（2016年度版）を新たに公開しました。当該科目では、組織論や人事管理を中心に経営学の諸理論、経営学上の重要概念や理論、組織論に関する近年の展開、組織における教育・学習の意味や方法論、企業における教育活動を考える上で不可欠な人事管理について学び、企業経営と人材育成の関係について理解を深めます。また、各回で指定された課題図書と自らの経験を踏まえて課題に取り組み、受講者同士で相互コメントを行いながら、企業・組織内人材育成担当として、教育の構想・企画・検討するための基礎を身に付けることを目指しています。

英語コンテンツへの要望の増加を受け、本年度は、教授システム学研究総論（2015年度版）の英語版を公開しました。次年度以降も、新しいプラットフォーム（Moodle）にて公開した科目の英語化を順次進める予定です。

図：公開科目 トップページ

公開科目

本専攻の科目を一部公開します。どのような学習ができるのか、体験してください。
 ※公開科目はカッコ内の年度のもです。現在は内容を一部変更している場合がございます。最新の科目内容につきましては、シラバスをご確認ください。

[特別研究 I（2007年度版）](#)

特別研究 I は、研究の第一段階に位置づけられた科目です。各教員の研究領域やテーマを確認しながら、自分の研究のテーマや方向性を考えるために参考にしてください。本専攻に入学するとどのような先生にどのようなテーマでの指導を受けることができるか、より具体的に知ることができます。

[基盤的教育論（2007年度版）](#)

基盤的教育論では、教育学の視点からeラーニング実践を点検するための基礎を培います。教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる科目です。入学をお考えの方は事前に目を通しておくと、スムーズに他の科目の学習を進められます。

図：本年度公開科目 『経営学特論』

経営学特論(2016-66-15190)

Home / コース / 2016-66-15190 / 第2回：人材マネジメントの動向(1)：人材マネジメントの考え方 / [タスク2]掲示板(サンプル)

[タスク2]掲示板(サンプル)

守島（2004）をもとに、人材育成担当者ための「人材マネジメント論の基本概念に関する7つのQ&A」を作成し、掲示板に書き込んでください。

さらに、他の受講者が作成したQ&A集を1つ以上選び、自分が作成したQ&A集と比較検討した上で、その違いについてコメント（スレッドへ返信）してください。

[【タスク2】実施についての留意点はこちら](#)

※コメントを終えないとタスクがpassになりませんので、忘れず行うようにしてください。

ディスカッション

★ 「人材マネジメント論の基本概念に関する7つのQ&A」

ディスカッション開始

anonlastname35 ...
2016年 10月 30日

最新の投稿 ↓

anonlastname15 ...
2016年 10月 30日

返信

1

公開科目一覧

【博士前期課程】

（新規）経営学特論（2016年度版）：日本語版

企業・組織内の人材育成や教育について構想・企画・検討するための基礎を培う科目

特別研究 I（2007年度版）：日本語版・英語版

研究の第一段階に位置づけられた科目

基盤的教育論（2007年度版）：日本語版・英語版

教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる科目

eラーニング概論（2009年度版）：日本語版・英語版

eラーニングを教育に導入するための基礎科目

基盤的情報処理論（2010年度版）：日本語版・英語版

eラーニング教材の開発に必要な情報処理基礎知識（特にWeb活用）の修得を目指す科目

インストラクショナル・デザインⅡ（2014年度版）：日本語版

eラーニングを組み入れた教授システムの青写真と導入プロセスの提案、現状システムの改善計画の提案ができるようになることをめざす科目

【博士後期課程】

教授システム学研究総論（2015年度版）：日本語版・（新規）英語版

博士後期課程の導入科目として位置づけられた科目

共同利用拠点事業④

講師派遣

本センターではインストラクショナル・デザインについて学ぶ機会を提供するために、講師派遣をしています。

本年度の取り組みの概要

昨年度に引き続き「FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣」の継続・拡大を図りました。他の取り組みとも連携しつつ、可能な限り、受講者参加型のFD研修を実施しました。本年度はコロナ禍の影響を受け、毎年継続して行ってきた研修の中にも中止になったものがありましたが、一方で、対面授業のオンライン化の必要性が高まり、オンライン教育に関する研修が増加しました。また、本年度の特徴として、受託した研修自体のオンライン化も進み、オンラインで同期で実施するもの、非同期でオンデマンドの動画を提供しテキストによる質疑応答を含むなど、多様な形態で提供しました。

講師派遣として、4名の教授システム学研究センターの教員が、講師として、大学教職員対象の研修を21件、その他を対象とした研修を10件、のべ、31件行いました（表1参照）。昨年度は、大学教職員対象の研修を20件、その他を対象とした研修を18件、のべ、38件でした。昨年度と比較すると、のべ件数としては、7件減少しましたが、大学教職員対象の研修は1件ですが、多くなっています。

本年度の大学教職員対象の研修では、大学教員1522名、大学職員144名、大学院生49名が本センターの研修を受講しました。昨年度の大学教員627名、大学職員93名、大学院生34名と比較すると、大学教員の受講者数が倍以上に増えました。これは、教員がニーズを感じていること、オンラインで開催されたこと、オンデマンドで提供されたことなどが理由として考えられます。

一般・その他の研修では、対象者を設定していない一般を対象とした研修、その他として、専門学校教員、医療関係者対象の研修について整理しました。一般・その他の受講者は987名で、本年度の講師派遣による受講者数は、1115名でした。昨年度ののべ1917名と比較すると減少しました。

研修の内容は、授業設計、教材設計はもちろん、人材育成、学習環境デザイン、創発思考、研究成果の普及・活用、アクションプラン作成、コンピテンシー等、多岐に渡りました。研修の規模も、10数名の研修から、100名や300名を超える研修がありました。主催者も、大学だけでなく、企業、官公庁、各種財団、学会等で、それぞれの団体のミッションや課題に合わせ、研修を行いました。また、本年度も国際的な機関による研修も3件ありました。

表2は学校種別による参加者内訳を示しています。大学教職員対象の研修をみると、大学教員のうち、国立大学教員が460名、私立大学教員が1104名、公立大学教員が104名でした。大学教員の他に、大学共同利用機関法人20名、民間独立行政法人等が20名でした。昨年度と比較してどの区分からも参加者が増加しました。

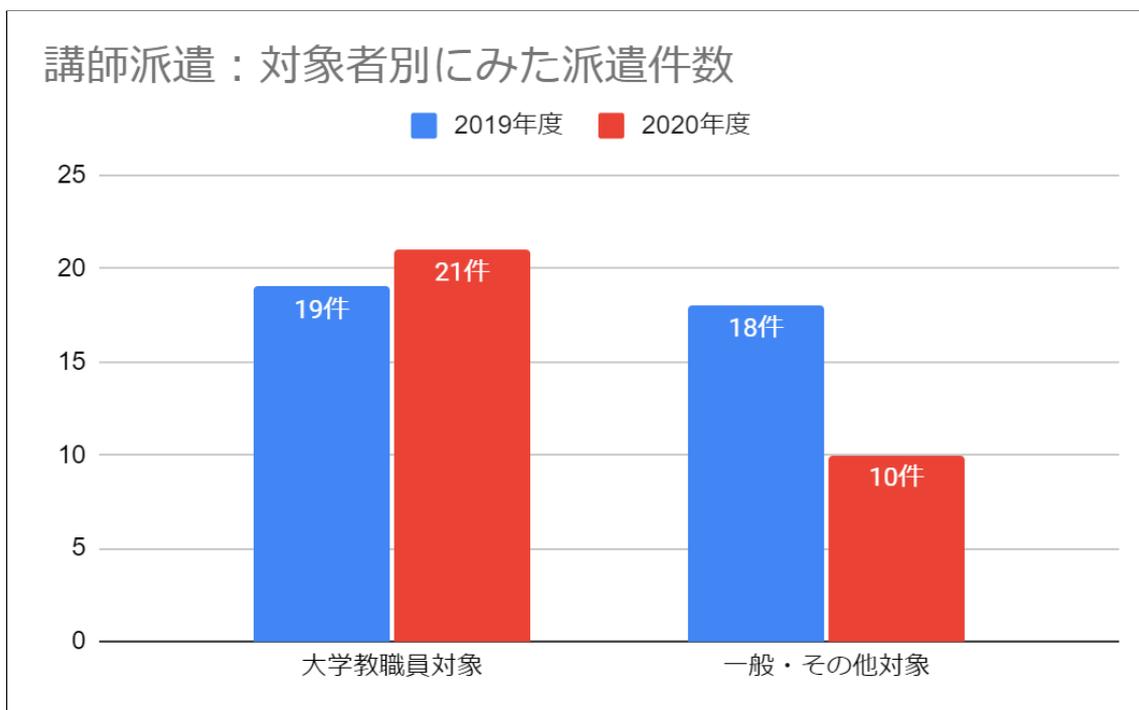
また、地域別にみると、大学教職員対象の研修では、地域が特定できない不明を除き、関東が290名で一番多く、次いで多かったのは、東北からの231名でした(表3参照)。一般的に大人数を対象とした研修やセミナー等では、受講者の地域を特定することが難しく、不明数は大学教職員対象研修で717名、一般・その他対象研修で、880名となっています。一般・その他でも、不明を除くと、関東からの受講者が120名で一番多くなりました。

本年度も、依頼者のニーズに合わせ、受講者がより能動的で積極的に参加できる研修を提供してきました。次年度も、さらに、受講者が自ら学ぶ研修、研修後も学び続けられるような研修を提供していきたいと考えています。

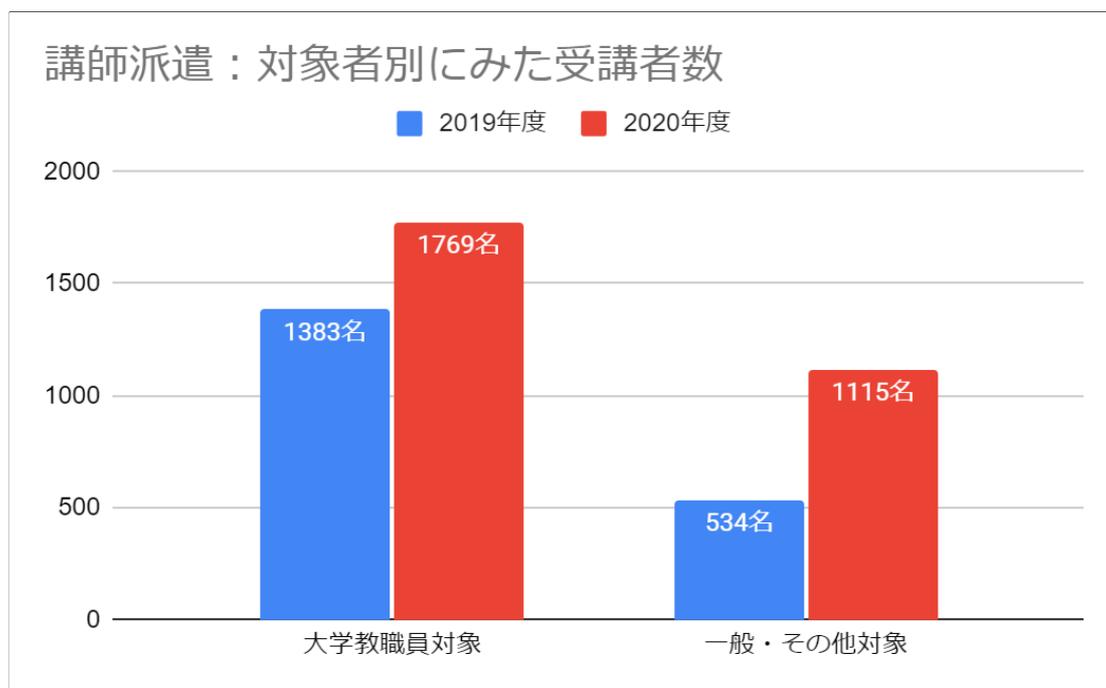
表1：研修の対象者

	大学教職員対象				一般・その他対象			
	2019年度		2020年度		2019年度		2020年度	
講師派遣件数・ 受講者数	19件	1383名	21件	1769名	18件	534名	10件	1115名
大学教員	19件	627名	20件	1522名	0件	0名	5件	5名
大学職員	5件	93名	4件	141名	0件	0名	0件	0名
大学院生	3件	34名	6件	49名	0件	0名	6件	6名
その他	9件	629名	3件	57名	18件	520名	10件	1104名

* 1：うち一件は職員対象



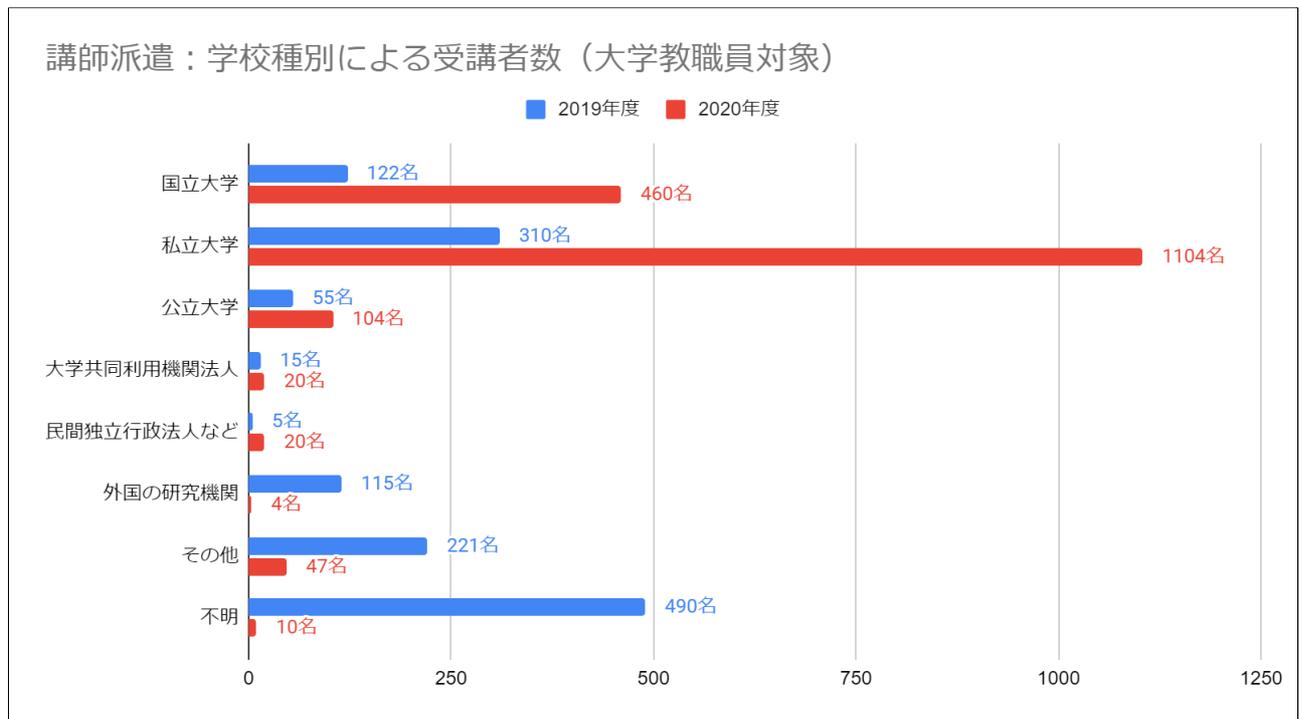
図：対象者別にみた派遣件数（2019年度と2020年度の比較）



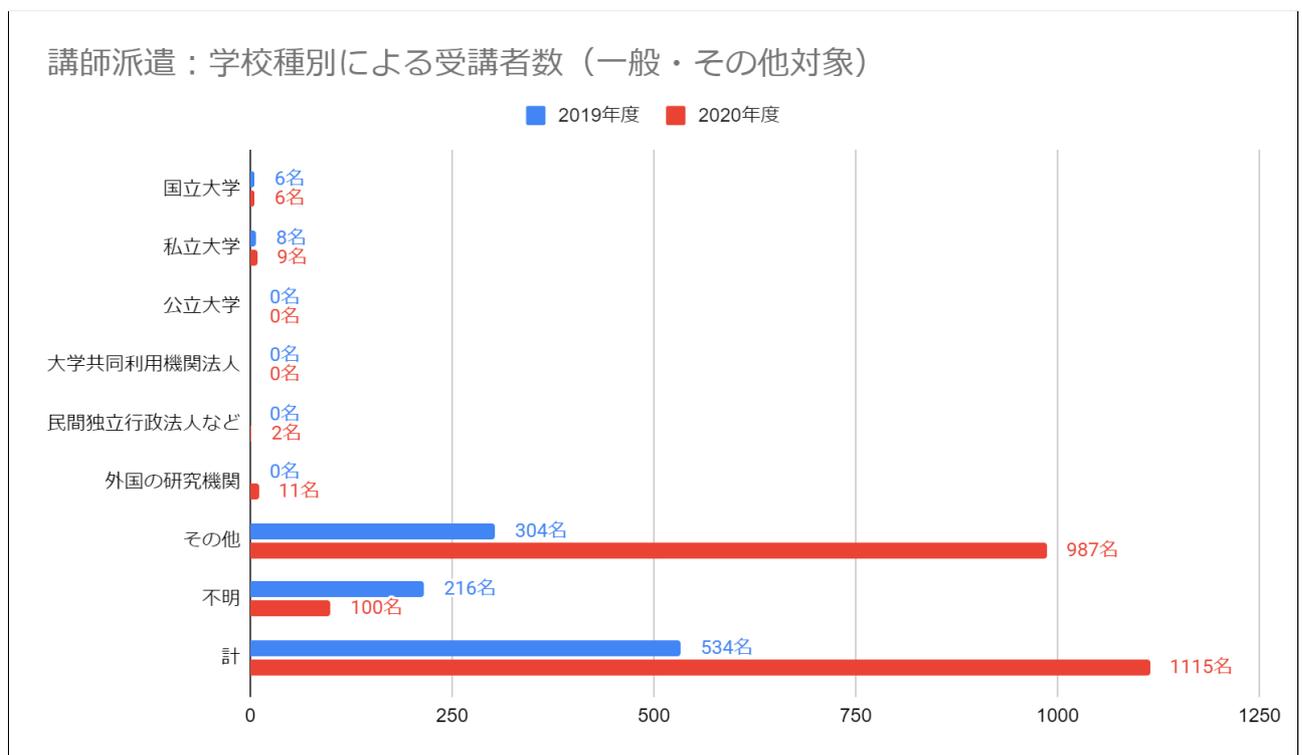
図：対象者別にみた受講者数（2019年度と2020年度の比較）

表2：学校種別による受講者内訳

	大学教職員対象 (名)		一般・その他対象 (名)	
	2019年度	2020年度	2019年度	2020年度
国立大学	122	460	6	6
私立大学	310	1104	8	9
公立大学	55	104	0	0
大学共同利用機関法人	15	20	0	0
民間独立行政法人など	5	20	0	2
外国の研究機関	115	4	0	11
その他	221	47	304	987
不明	490	10	216	100
計	1383	1769	534	1115



図：学校種別に応じた受講者数（2019年度と2020年度の比較）



図：学校種別に応じた受講者数（2019年度と2020年度の比較）

表3：地域別による受講者内訳

	大学教職員対象 (名)		一般・その他対象 (名)	
	2019年度	2020年度	2019年度	2020年度
北海道	37	76	0	1
東北	28	231	0	0
関東	187	290	25	120
中部	30	64	57	0
近畿	1	150	79	0
中国	36	51	0	2
四国	12	29	0	0
九州	333	161	117	1
海外	134	0	0	111
その他	4	0	0	0
不明	531	717	256	880
計	1383	1769	534	1115

表4：講師派遣の事例

研修日	講師	研修主催者	研修名	研修場所 (オンラインは同期)
2020/4/22	鈴木克明	国立情報学研究所	4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム	オンライン
2020/4/23	鈴木克明	名古屋大学	第100回客員教授セミナー 第4回教育の質保証に関する研修セミナー	オンライン
2020/5/11	鈴木克明	東北大学	東北大学医学部教室員会主催ウェブセミナー	オンライン
2020/8/30	鈴木克明	東北大学	東北大学PDセミナー	オンライン
2020/9/5	鈴木克明	東京理科大学	第27回FDセミナー	事前録画講演
2020/9/7	鈴木克明	中村学園大学・短期大学部	中村学園大学・短期大学部教育ワークショップ	非同期オンライン
2020/9/15	鈴木克明	横浜創英大学	横浜創英大学FDワークショップ	オンライン
2020/9/20	鈴木克明	高知医療センター・高知県立大学	オンライン教育講演会	オンライン
2020/9/23	鈴木克明	岩手県立大学	岩手県立大学社会福祉学部FD研修会	オンライン
2020/11/16	鈴木克明	帯広畜産大学	帯広畜産大学FD研修会	オンライン
2020/11/16	鈴木克明	IDE東北支部	令和2年度IDE大学セミナー	オンライン
2020/12/1	鈴木克明	日本経済新聞社 日経BP	ヒューマンキャピタル/ラーニングイノベーション2020オンラインセミナー	オンライン
2020/12/5	鈴木克明	(一社) 日本臨床工学技士教育施設協議会	第6回臨床工学技士養成教員学術研究会	オンライン

2020/12/9	鈴木克明	IEEE TALE2020	Special Session 2, Technology and Education in Japan: Research, Practice, and More	オンライン
2020/12/17	鈴木克明	株式会社パーソル総合 研究所	特別無料セミナー	オンライン
2020/12/21	鈴木克明	神戸女子大学看護学部	2020年度第1回FD講演会	オンライン
2021/1/29	鈴木克明	一般社団法人国際開発 機構 (FASID)	2020年度 研修マネジメ ントセミナー	オンライン
2021/2月	鈴木克明	九州看護福祉大学	2020年度SD講座	非同期オンラ イン
2021/2/2	鈴木克明	法政大学	2020年度第3回FD教員セ ミナー	オンライン
2021/2/15	鈴木克明	徳山工業高等専門学校	令和2年度徳山工業高等 専門学校FD講演会	オンライン
2021/2/22	鈴木克明	名古屋女子大学総合科 学研究所	名古屋女子大学講演会	オンライン
2021/3/12	鈴木克明	京都大学大学院医学研 究科 医学教育・国際 化推進センター	指導医のための医学教育 学プログラム「京大 FCME」 (Foundation Course for Medical Education)	オンライン
2020/11/2	鈴木克明 合田美子	AECT	AECT Presidential Panels "From COVID-19 to Adaptive Education in Times of Emergency and Crisis"	オンライン
2020/11/13	鈴木克明 合田美子	一般社団法人 e-Learning Initiative Japan (eラーニング アワードフォーラム 運営事務局)	eラーニングアワード フォーラム	オンライン
2020/8/22	合田美子	甲南女子大学	2020年度夏期教員研修	オンライン
2020/11/13	合田美子	一般社団法人 e-Learning Initiative Japan (eラーニング アワードフォーラム 運営事務局)	eラーニングアワード フォーラム	オンライン
2021/2/25	合田美子 松葉龍一	Japanese-German Research Collaboration on Connected and Automated Driving: Human Factors	Online webinars in winter 2020/2021 What role does education play in the safety of automated driving cars?	オンライン
2021/3/10	都竹茂樹	産業医大	FDセミナー	オンライン
2020/12/23	平岡齊士	広尾看護学校	看護教育におけるオンラ イン授業のつくり方と 教授法	オンライン
2021/2/18-19	平岡齊士	昭和薬科大	教授設計の基礎	オンライン
2021/2/26	平岡齊士	帝京大	FD/SDセミナー、LTセミ ナー	オンライン

派遣事例1

講師：鈴木克明

コーディネータ：合田美子

実施日：2020年12月9日(木)17:00~18:30

場所：オンライン開催

研修名：Special Session “Technology and Education in Japan: Research, Practice, and More”, IEEE TALE 2020

参加者：約70名

2020年12月9日～11日まで開催された国際学会IEEE TALE(Teaching, Assessment, and Learning for Engineering) 2020において、日本のテクノロジーと教育についての発信を目的としたSpecial Sessionが、Technology and Education in Japan: Research, Practice, and Moreと題して開催された。本セッションは、当該国際学会のAcademic Sponsorである、関連研究分野で日本を代表する2学会、日本教育工学会(JSET)と日本教育システム情報学会(JSiSE)が合同で行われた。

RCiSセンター長であり、JSET会長の鈴木克明先生とJSiSE会長の柏原昭博先生(電気通信大学)とが日本の教育工学研究について、現在の状況、アプローチ、将来の展望などについて講演した。国内外の研究者約70名が参加し、RCiSセンター教員の合田がコーディネートを行い、質疑応答についても活発に行われた。

学会自体が、VirBELA (<https://www.virbela.com/>) を基盤としたiLRN 3D Virtual Campus (以下、仮想キャンパス) で実施され、TALE2020のテーマに含まれるTransformative Technologyに相応しいプラットフォームでのLearning Experienceについても意見交換がなされた。海外の研究者から「JSET会員になるにはどうすればよいか？」という質問が出るなど、日本の教育工学研究について、国際的にプレゼンスを上げることに繋がったと考える。



図1 仮想キャンパス内でのJSET・JSiSE合同特別セッションの様子

派遣事例2

講師：平岡齊士
コーディネータ：合田美子
実施日：2021年2月18日（木）19日（金）
場所：オンライン開催
研修名：昭和薬科大学令和2年度 FD研修会
参加者：約72名

この研修は、昭和薬科大学の教員を対象としたFD研修として行われました。全2日の日程で、1日目は2時間、2日目は1時間で完結する短期研修です。参加したのは、実際に授業を担当する教員が中心で、シラバス作成の課題を抱えていました。

1日目はIDの基本的な考え方を提示したのち、それを自身の授業に採用するかどうか、採用するならばどのように採用するかについて、個人での内省的なワーク、その結果を2～3人のグループで検討するワークを繰り返し行い、そこで生じた「もやもや」を解消するために全体での質疑応答を行いました。グループは、担当する教科・専門分野ごとに分けて、題材として各人が実際に担当する科目の内容を検討できるようにしました。1日目終了後、2日目開始までに1日目で検討した内容に関して改めて検討し、自身の授業改善案を準備することを2日目の事前課題といたしました。

2日目は質疑応答の形で1日目の振り返りを行ったほか、非同期学習設計の考え方を提示しました。その後、グループで相談しながら各自の授業改善案を修正するワークを行いました。最後には質疑応答の時間を設けて、参加者が自分自身の科目に取り入れる際の問題点について、質疑応答を行いました。

本研修は、コロナ感染対策として、Zoomを用いた同期型オンライン研修として実施しました。①ブレイクアウトルーム機能を活用して、参加者の担当科目に基づいて33組でのグループワークを行う②参加者からの質問・疑問については、Googleドキュメントを活用して研修期間中を通して受け付け、講師が逐次回答を記載・返答するという方略で、双方向型のアクティブラーニングを提供いたしました。Googleドキュメントには、参加者から多様な質問・感想が書き込まれ、講師や参加者間でのやり取りが多数行われました。参加者の質問等が文字として可視化されたことが、さらなる質問や議論を導き出したとも推測されます。

最終レポート等の課題は提示していませんが、参加者から「今日がシラバスの締め切りだったのですが、昨日の講義でとても参考になり、いままでと違うシラバスを書くことができました。」というコメントがありました。

講演型FD研修会を脱却するための研修モデルについてのご提案

本センターでは、これまでにFD研修講師派遣を依頼頂いた際に、様々な形の研修を提言してきました。外部講師としての依頼を受け、講演をした後で、質疑応答の時間を最後に取り、という従来型のものもありましたが、他のやり方はどうでしょうか、という提案をした結果、それを受け入れていただき、効果が上がったケースもありました。これまでの経験をもとに類型化した研修モデルには、以下のようなものがありました。

<外部講師講演型>

重要だと思われるトピックの第一人者を招聘して行うFD。例えば、アクティブラーニング、パフォーマンス評価、オンライン授業など。講師によっては、新しいコンセプトを事例に即して知る機会になることもあるが、力量に依存するので、「お勉強」に留まり実際の授業改善には直結しない場合も散見される。講演の最後には質疑応答の時間を設ける場合もあるが、質問があまり活発に出ずにFD担当者が困るケースも多い。

<事前質問付外部講師講演型>

外部講師を派遣する際に、事前に質問を受講予定者から募り、その回答を含めた講演にしてもらう。講演時間の半分程度を講演にあて、残りの時間を事前質問への回答にあててもらうのが効果的。ケースによっては、事前質問への回答を最初にしてから、まとめの講演というパターンがより講演を身近に感じられ、満足感を高めることもある。

<事前資料付講演（反転授業型）>

基本的な内容については事前に論文や講義ビデオで情報を得てもらい、その上で当日の講演に臨んでもらう。可能であれば、事前資料についての質問を事前にあるいは参集時に受付で出してもらう。講演時間は事前資料の内容についての質疑応答を中心に構成するか、ワークショップ的に例えば「事前資料の内容を今後の担当授業にどう応用するか」を検討する時間とする。担当科目でもこの形式（反転授業）を採用してもらう布石として学習者として体験してもらう意図も兼ねて行う。

<講演型+アクションプラン作成>

次回にアクションプランをどう実現したかをシェアする会を設定・予告し、それまでに活用することに誘う。新しいコンセプトを導入した後で、個人あるいはグループ（担当科目やカリキュラムを共有する者同士）で、このコンセプトをどのように活用して授業を改善できそうかを検討・議論し、アクションプランを作成する（次回のFDまで、今年度中、2-3年後までには、など）。

<事前課題+アクションプラン作成>

FD開始前に授業改善のヒントとなるような文章を全員が読んで、疑問点や自分の授業改善にどのように活用できそうかを検討した結果を持ち寄ってもらう方式。集まった時には疑問点を解消した後で、各自の検討結果を共有し、互いに気づいてなかった点を加えてアクションプランを作成して、次回につなげる。

<まな板の鯉方式>

これまでに様々な工夫をして授業改善に取り組んできた教員の事例を紹介してもらい、自分の授業で参考になる点（まねできそうな点）や更なる改善アイデアについて小グループで話し合い、授業提供者が持ち帰るお土産とする。例えば、ICT活用法、遠隔授業構成法、学習意欲を高める方策などのテーマを設定し、関連する工夫を数例並べて検討するとさらに効果が高まる。

<ワークシート形式>

各自が担当する授業について共通のフォーマットを用いて現状分析し、改善の糸口を見つける方式。ARCSで学習意欲を向上する、大学の授業点検シートで出入口と方略をチェックするなど。ワークシートへの記入を事前課題として記入済みのものを持ち寄って議論中心に展開すると効率的になる。さらにアクションプラン作成と組み合わせて次回につなげることも効果的。代表的な取り組みを次にまな板の鯉方式で共有することにつなげる前段階としての活用するのもよい。

<他のやり方>

本センターでは、講師派遣に際して、その他にも有効だと思われるやり方を模索していきたいと考えています。遠慮なくご相談ください。

共同利用拠点事業⑤ オンラインプログラム

本センターでは2019年から、
授業設計について学習するオンラインプログラム
「教育改善スキル修得オンラインプログラム」
を公開しています。

本年度の取り組みの概要

本取り組みでは、高等教育機関の授業における学習目標、評価方法、授業方法の設計に関する知識・スキルを身につけるためのオンラインプログラム（科目デザイン編）の運営を行っています。

基礎からの積み上げ方式による暗記から始まる専門家育成の枠組みを脱却し、学修の有用性が最初から感じられる科目デザインを実現することが社会人の学び直しにも有効であり、かつ社会人経験がない学生にとっても有用であることを前提としています。

本年度は有料版の第2期と第3期を募集し、6名の方が修了され、現在、6名の参加者が3月の修了を目指して学習を進めています。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle/>

The screenshot shows the Moodle course homepage. At the top, there is a header with '日本語 (ja)' and 'Log In'. Below the header, the course title '教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）' is displayed. The main content area is divided into sections:

- ANNOUNCEMENTS**: undefined
- ホーム画面**: Home page section containing four modules:
 - 初めてアクセスされた方へ**: A yellow box with a '学習の進め方' button.
 - モジュール1：大学教育に関する5つの物語**: A blue box with an 'アクセスする' button (Account not required).
 - モジュール2：認知的発達を促す授業方法**: A blue box with an 'アクセスする' button (Requires login).
 - モジュール3：評価と単位認定の見直し**: A blue box with an 'アクセスする' button (Requires login).
 - モジュール4：学習目標の高度化**: A blue box with an 'アクセスする' button (Requires login).
- ナビゲーション**: A sidebar with buttons for 'ホーム画面へ戻る', '進捗管理画面へ戻る', and two '学習状況証明書を発行' options (one for free users, one for paid users).
- 関連サイト**: A section with links to related sites, including the Research Center for Instructional Systems (RCiS) and the Graduate School of Instructional Systems.
- ご意見はこちら**: A section for providing feedback, with a note that users can contact the support team via buttons below.

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）トップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

オンラインプログラムでは、大学の授業設計について、主に学習目標、評価方法、授業方法の3点から学習し、学習した内容を元に、自身が所属機関で担当している授業を修正します。また、ミネルバ大学の事例等を紹介し、今後の大学についての考え方についても議論します。

無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができましたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。

また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

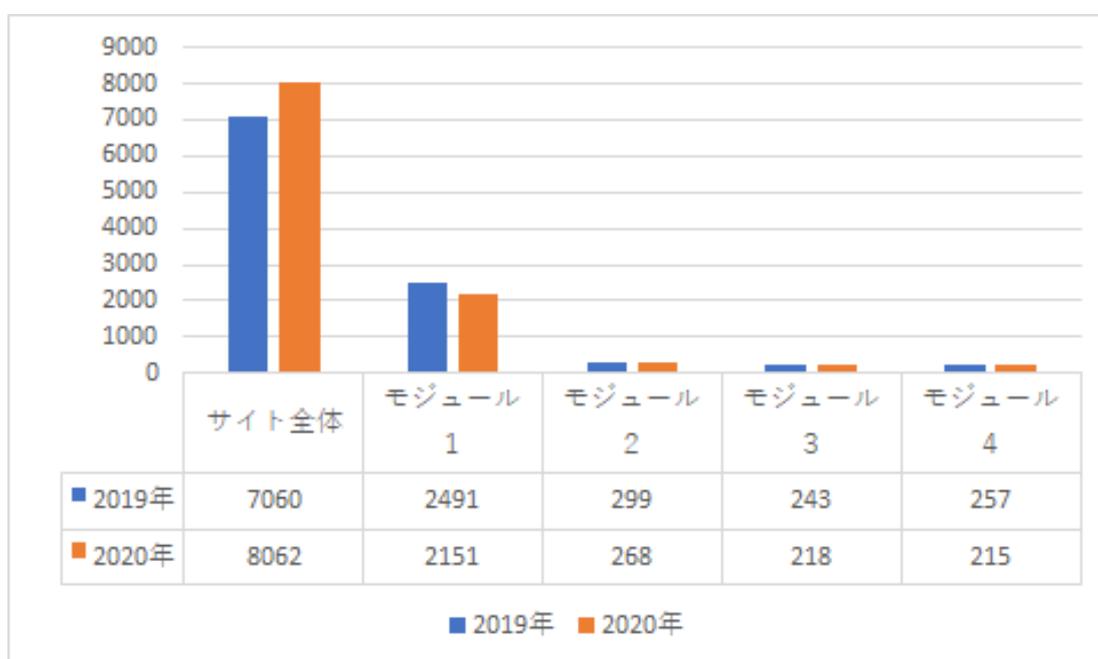
表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール1 大学教育に関する5つの物語	無料版 有料版	高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論します。
モジュール2 認知的発達を促す授業方法	無料版 有料版	『パラレルセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった学習者の認知的発達を踏まえた支援について学習します。
モジュール3 評価と単位認定の見直し	無料版 有料版	期末テストの成績が悪い、実技の授業をどのように評価すればよいのかといった評価に関する問題について学習します。
モジュール4 学習目標の高度化	無料版 有料版	『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といった学習目標に関する問題について学習します。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

アクセス数

2020年3月から2021年2月までの間に、延べ8062名（IPアドレス）がオンラインプログラムへアクセスしました。各モジュールへの訪問者数および無料版プログラムの学習を修了し、デジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数 (IPアドレス)	無料版プログラム： デジタルバッジ取得 者数
モジュール1：大学教育に関する5つの物語	2151	25名
モジュール2：認知的発達を促す授業方法	268	19名
モジュール3：評価と単位認定の見直し	218	20名
モジュール4：学習目標の高度化	215	17名



図：サイトへのアクセス数（IPアドレス）の比較（2019年度と2020年度）

* サイト全体およびモジュール1へのアクセス数については、一部、ロボットによるアクセス数が含まれています。

有料版プログラム

有料版では、各モジュールでの学習を進めながら、実際に所属機関で担当している科目（大学院生の場合は将来担当したい科目）を改善していきます。有料版プログラムには以下の特徴があります。

<特徴1：相互レビューに基づく学習>

本プログラムでは各モジュールで提出する課題等はすべて、他の学習者との相互レビューを行いながら、質の改善を行っています。

<特徴2：ポートフォリオの活用>

本プログラムでは、各モジュールで提出する課題や自身の科目のシラバス等をポートフォリオにまとめるお手伝いをしています。そのポートフォリオを相互レビューや対面ワークショップ等で他の学習者と共有します。最終的にはポートフォリオを誰でも閲覧可能な形で公開できるようにして、発行される履修証明書と併せて、学習者自身のキャリアアピール等で活用していただくことを想定しています（公開は任意）。

<発行される証明書>

本プログラムでは、すべての学習を完了し、最終期限日までに合格することで文部科学省の制度に基づいて熊本大学から履修証明書（紙媒体・デジタル媒体）が発行されます。学習途中でも（無料版でも）学習状況証明書（デジタル媒体）が発行されますが、これは文部科学省の履修証明制度に基づくものではありません。

また、履修証明書（デジタル媒体）には任意で本プログラムで作成を支援するポートフォリオへのリンクを埋め込むことができ、将来、自身の学習についてアピールする際に活用することができます。

修了証明書

デジタルバッジ一覧とポートフォリオ

氏名： 長岡千香子

本センターが学校教育法第105条に基づいて提供した履修証明プログラム
「教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)」(計60時間)
第1期(2019年12月から2020年3月)
を履修し、合格要件をすべて満たしたことを証する。

モジュール1
大学教育に関する5つの物語

モジュール2
認知的発達を促す授業方法

モジュール3
評価と単位制度の見直し

モジュール4
学習目標の高度化

モジュール5
最終課題

デジタルバッジをクリックすると、各モジュールの詳細な学習活動を確認できます。

▶ [ポートフォリオはこちら](#)

2020年3月31日 公印省略
熊本大学 システム学研究センター

図：履修証明書（デジタル版）

受講後アンケート調査の結果

教育改善スキル修得オンラインプログラム 科目デザイン編（第1期・2期）の受講後アンケート（修了者16名のうち11名（バッジ取得者のうち69%）では、以下、1）～5）の設問に対する回答を求めました。

1) 各モジュールでの説明、クイズ等で何か改善してほしい点があれば教えてください。

「モジュール2以降はいずれも試験問題について再検討が必要だと感じます」、「使用されているが不適切、という選択肢の扱いが難しかった」など、モジュール2～4の力試しテストに関する回答が多く見られました。これらの意見を踏まえ、現在、力試しテストの修正作業を行っています。

2) 学習を促すメールとして各キックオフミーティングや対面学習の前に学習を促すメールを配信しました。これらはあなたの学習進捗にとって役に立ちましたか？

11名中、10名の回答者が「役に立った」と回答し、その理由として、「スケジュールに入れていても、仕事をしていると忘れてしまうこともあるので、リマインドメールはありがたかったです」、「内容の再確認や、対面学習の動機づけにつながりました」等の回答を得ました。

3) 修了証明書（電子版）は今後、どのような目的で利用しますか？

11名中、10名の回答者が「将来、就職先等に提示することで自身の学びをアピールする」、「自身の学びを振り返るために利用する」目的で修了証明書（電子版）を利用すると回答しました。

4) ポートフォリオの利用目的を教えてください。

11名中、10名の回答者が「将来、就職先等に提示することで自身の学びをアピールする」、「自身の学びを振り返るために利用する」目的でポートフォリオを利用すると回答しました。

5) 本プログラムの学習で身についたと感じた知識・スキルと感じたものがあれば教えてください。

本プログラムの学習を通し、受講者がどのような知識・スキルが身についたと感じているのか、その一部を紹介します。

受講生として本格的にMoodleを活用して受講を進めることは初めての経験だったが、LMSシステムの苦手意識が徐々に薄れていき、使い勝手がわかっていったことは良い経験になった。むしろ通常の一方向的な対面講義よりも主体的かつ自分のペースで学びを進めることが出来たという実感があるので、今後自分が授業を受け持つことになった際は、積極的にLMSを活用していきたい。

力試しテストや複合練習問題などに示されていた具体的な事例や詳細な解説によって、何をなぜ重視するのか、どう改善していけばよいのか、考え方を徹底して学ぶことができたと思います。そして、学生に対して専門知識・技能の列挙で終えることなく、成長や自立を促すには、このように学ぶ重要性に気づかせ、その仕込みをこうやってやるのだとお手本を示してくださったととらえています。

知識・スキルはもちろんですが、IDに基づくプログラムを受講することで、教育実践を振り返るための準拠枠を得ることができ、自信を持つことができるようになりました。

各問題にあった改善案はすべて参考になった。同じように授業改善をしようとしている同僚へのアドバイスに応用できると感じた。インストラクショナルデザインの工具箱のように、そうした事例を多く収載された本があれば面白くて参考になると思う。

対面の際に教材設計の裏話・ネタばらし的な側面を聞いたのは、本務校に帰れば同じ立場になる教材設計者にとっては、ああそういう考え方でいいのねという気持ちにもなり、より理解が深まりました。対面授業では時間の関係上、まるめて処理されてしまった、議論しつくせなかった疑問もいくつかあったのですが（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの徹底化が為されていないという問題に対してとる戦略として、それを蔑ろにする旧世代が引退するのを待つというのは戦略ではないのでは...）、こういう（政治的？）状況もわかってメタ的には面白かったです。

「自律学修支援編」の公開開始

履修証明制度による講座提供を開始した「科目デザイン編」の続編として、「自律学修支援編」の提供を開始しました。大学生の自律的な学びを支援するために授業にどのような要素を盛り込むことができるかについて、様々なICT活用のヒントを提供するとともに、『学習設計マニュアル』を教員の立場から読み進めていくというコンセプトで整備を進めてきました。本年度は、無料版を公開し、令和3年度中には、履修証明制度による有料版の運用を開始する予定です。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。	学習の進め方
---	---

モジュール1：大学教育に関する5つの物語

モジュール1では、高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論しましょう。	アクセスする <small>アカウントなしで閲覧可能</small>
--	--

モジュール2：自学自習を促すICT活用

モジュール2では、学習者に自学自習を促すためにICTで何ができるのか、その手段を学び、実際にICTを導入した授業設計ができるように学びます。	アクセスする <small>要ログイン</small>
--	---

モジュール3：学びの場を作る（学びの場の提供）（6月公開予定）

モジュール3では学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。	
--	--

モジュール4：学習スキルを学ぶ機会の付与（7月公開予定）

モジュール4では、学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのか設計できるように学びます。	
---	--

モジュール5：最終課題（8月公開予定）

本プログラムの最終課題として、モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。	
--	--

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学修支援編）トップ画面

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

科目デザイン編同様、無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。

また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール1 学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる	無料版 有料版	学生の自律学習を支援するための第一歩として、学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくるための7つの提案をします。「大学での学び方」を教えるために、「自分の科目で何ができそうか」を考えてみます。
モジュール2 自学自習を促すICT活用	無料版 有料版	学習者に自学自習を促すためにICTで何ができるのか、その手段を学び、実際にICTを導入した授業設計ができるように学びます。
モジュール3 学びの場を作る（学びの場の提供）	無料版 有料版	学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。
モジュール4 学生を自己調整学習者に育てる	無料版 有料版	学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのか設計できるように学びます。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

持続的な産学共同人材育成システム構築事業

**本センターでは東北大学と協力して、
実務家教員が教育スキルを身に着けるための履修証明プログラムを
提供しています。**

概要

文部科学省の「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」（2019年度-2023年度）において、東北大学を代表校とし、熊本大学、大阪府立大学、立教大学の計4大学が連携して実施する取組「創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム」が2019年度より始まりました。RCiSは本取組の運営拠点及び中核拠点として採択され、現在、開発およびコンテンツ提供を進めています。



Kamamoto University
RCiS 教授システム学研究センター
Research Center for Instructional Systems

熊本大学大学院 Graduate School of Instructional Systems
社会文化科学教育部 教授システム学専攻
熊本大学

ホーム English お問い合わせ 検索

資料請求

教授システム学研究センターについて 教授システム学専攻について(大学院希望者向け) 研究者・教員 資料・リンク 研究成果 FAQ

文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」
運営拠点・中核拠点 採択 (2019～2023年度)

創造と変革を先導する 産学循環型人材育成システム

～学生も社会人も学び続け、日本の未来を拓く～

TOHOKU UNIVERSITY 熊本大学 大阪府立大学 立教大学

本事業について詳しく知りたい方は以下をクリック
→ 詳しくはこちら

産学連携教育イノベーター育成プログラム

<https://jitsumuka.jp/innovator/>

本センターは本事業の中核拠点として以下のプログラムを提供し、また、運営拠点として、プログラム修了者と大学をマッチングするための基盤整備を担当しています。

インストラクショナルデザイン指導力育成コース

<https://jitsumuka.jp/innovator/entry2021/>

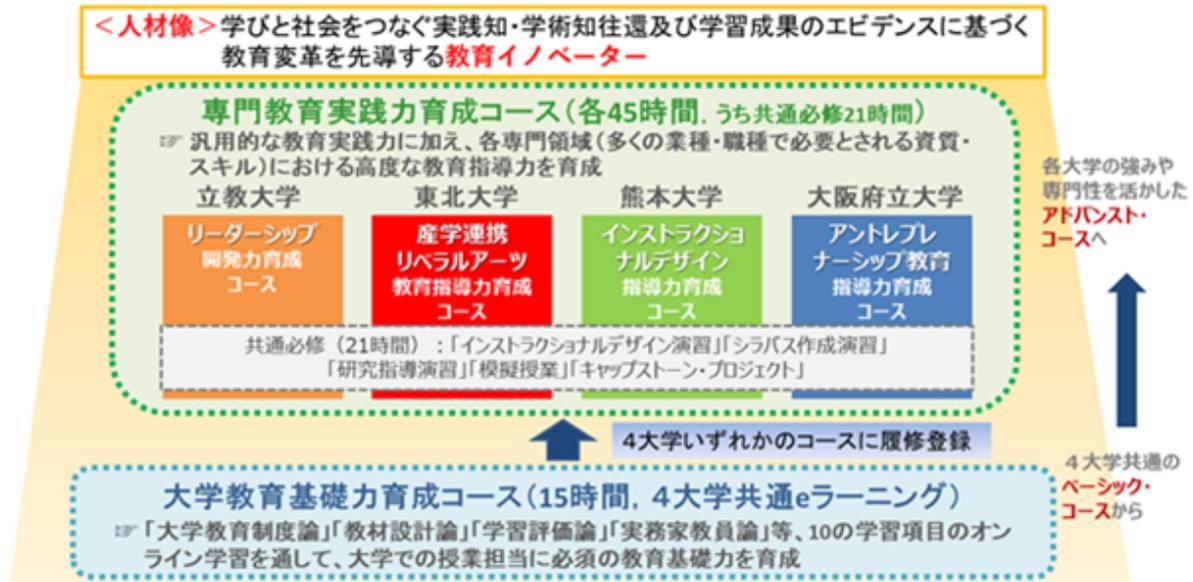
今年度は、上記のコースに対して〇名の方が参加され、2021年度7月の修了を目指して、日々、学習を進めておられます。

中核拠点

中核拠点

産学連携教育イノベーター育成プログラム（履修証明）

～インストラクショナル・デザイン（ID）による研修設計～



「産学連携教育イノベーター育成プログラム」は、文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」に採択された「創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム」の取組の一環であり、実務家教員を育成する研修プログラムです。

企業内教育訓練を含む教育の効果・効率・魅力を高めるインストラクショナルデザイン（ID）が学習できる日本初のeラーニング専門家養成大学院「教授システム学専攻」を設置・運営してきた経験・実績に基づき、効果的な教育実践を産学に普及できる実務家教員を育成しています。

本プログラムは、以下の4つの科目（60時間）で構成されています。

- 大学教育基礎力科目（15時間）（12の学習項目を含む）
- 汎用的教育実践力科目（9時間）（3つの学習項目を含む）
- 専門領域別科目（24時間）（10の学習項目を含む）
- 教育イノベーター実践演習科目（12時間）
（これからは、【】を科目、「」を学習項目とします）

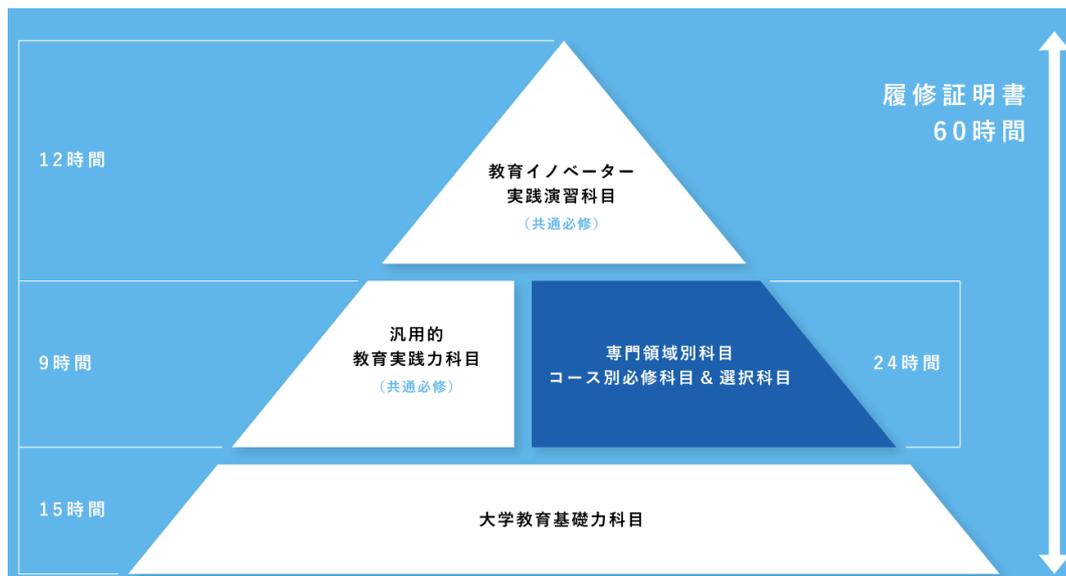


図. 産学連携教育イノベーター育成プログラムの構成図

本年度の取り組みの概要

今年度は、東北大学と共同で【大学教育基礎力科目】、【汎用的教育実践力科目】、【専門領域別科目】の学習項目1～8を開発しました。今年度は2020年11月1日よりプログラムの学習を開始しました。

【2020年度第1期】インストラクショナルデザイン指導力育成コース

ダッシュボード / マイコース / ID2020

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本プログラムへようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。	学習の進め方
デジタルハンドブックや、受講期間の延長希望届等の書類はこちらからダウンロードできます	各種書類へ

大学教育基礎力科目 (15時間)

大学で授業を担当するのに必須となる基礎的な知識・技能を修得します	アクセスする
----------------------------------	------------------------

本プログラムの学習を行う上でサポートが必要なときは、下記のメールアドレスまでご連絡ください。

inv.pro@rcis.kumamoto-u.ac.jp

[Moodle使い方サポートはこちら](#)

図：インストラクショナルデザイン指導力育成コースのホーム画面

1. 【大学教育基礎力科目】の開発・受講とアンケート調査

2.1 学習コンテンツの開発

2020年4月から10月にかけて、「大学教育基礎力科目」の12の学習項目を開発しました。開発作業は、以下のプロセスで進めました。

1. コンテンツの編集・掲載

収集したコンテンツ（動画、スライド、指定された必読文献や関連情報等）をMoodle上で編集し、掲載。

2. 学習項目のクイズの開発・作成

クイズ作成の方針決定後、クイズを作成し、Moodle上に実装しました。更に担当講師がクイズを確認し、修正しました。

3. 形成的評価および改善

協力者による評価と講師による確認・チェックの2種類の形成的評価を、8月29日から10月27日の間に行いました。協力者による評価は、1つの学習項目に対して2名の協力者が学習者として実際に学習し、評価を行いました。講師による評価は、協力者による評価の改善後、講師が最終確認を行いました。その後、形成的評価のレポート及び講師からのご意見を反映し、コンテンツを修正・改善しました。



図：【大学教育基礎力科目】の画面

2.2 受講期間と状況

IDコースとLAコースの受講生は2020年11月1日から2021年1月30日まで受講をしていました。IDコース15名のうち、14名の受講生が【大学教育基礎力科目】を修了し、次の学習科目に進みました。

2. 【汎用的教育実践力科目】の開発・受講とアンケート調査

2.1 学習コンテンツの開発

2020年11月から2021年2月にかけて、「汎用的教育実践力科目」を開発しました。開発は、開発計画立案、同期学習の設計、コンテンツ実装、形成的評価と修正というプロセスで進めました。また、2月27日（土）にオンライン（同期）学習を行いました。

学習項目1 研究指導演習（2月23日）		
教員が学生に考えるヒントを与え、動機づけ、励まし、対話を行いながら、課題遂行を促す「コーチング」技術を用いた研究指導について、ワークショップ形式で学びます。	コンテンツ	成果物
学習項目2 インストラクショナルデザイン演習（2月27日）		
大学教育基礎力科目の「インストラクショナルデザイン」や「授業設計論」で学んだ基礎知識を前提に、授業や教育プログラムの設計方法についてワークショップ形式で実践的に学びます。	コンテンツ	成果物
学習項目3 シラバス作成演習（2月28日）		
説得力あるシラバスを作るためには、授業の目標・活動・評価を構造化することが欠かせません。本演習では、オリジナルのワークシートを使いながら、構造的な授業設計のコンセプトを学びます。	コンテンツ	成果物

図：汎用的教育実践力科目の画面

3.2 受講状況

13名が受講し、【汎用的教育実践力科目】に合格しました。（1名の受講生が、着実な学習を目的とした長期履修を申請しました）

3. 【専門領域別科目】の開発・受講状況

3.1 開発

開発期間は、2020年11月から2021年2月であり、熊本大学担当の「基盤的ID論」、「教材設計演習」「動機づけ理論活用演習」「eポートフォリオ演習」の4つの学習項目を開発しました。

開発過程は、開発計画立案、各学習項目担当教員によるコンテンツ設計、コンテンツの実装、形成的評価の実施、改善で行いました。

開発過程においては、開発の計画を立て、各学習項目の担当教員がコンテンツの設計を行い、コンテンツを実装してから形成的評価をし、形成的評価の意見に基づいて改善するという手順で行いました。

The screenshot shows a web interface for a course titled '専門領域別科目 (インストラクショナルデザイン指導力育成コース)'. The left sidebar lists learning items: 1. 基盤的ID論, 2. 教材設計演習, 3. 動機づけ理論活用演習, 4. eポートフォリオ導入演習, 5. リベラルアーツ教育論, 6. STEM・文理融合教育論. The main content area displays the details for '学習項目1. 基盤的ID論'. It includes sections for '【目的】', '【学習目標】', '【授業方法】', and '【履修方法】'. Below this, there is a table summarizing the learning items.

学習項目	基盤的ID論	教材設計演習	動機づけ理論活用演習
内容	IDの基本的な考え方について理解した上で、掲示板による議論を行うとともに、それを応用する課題（自身の教育改善アイデア）を提出します。	自らの担当授業の中で、一コマ分の授業をするための、授業設計企画書・教授方法・教材・小テスト等を設計する練習を行います。	各機材事例に対し、その応用スキルを活用する練習を通じて、自
コンテンツ	コンテンツ	コンテンツ	コンテンツ
議論	議論1 議論2	議論1 議論2	議論1
課題	課題	課題	課題

図：【専門領域別科目】の学習項目1～8

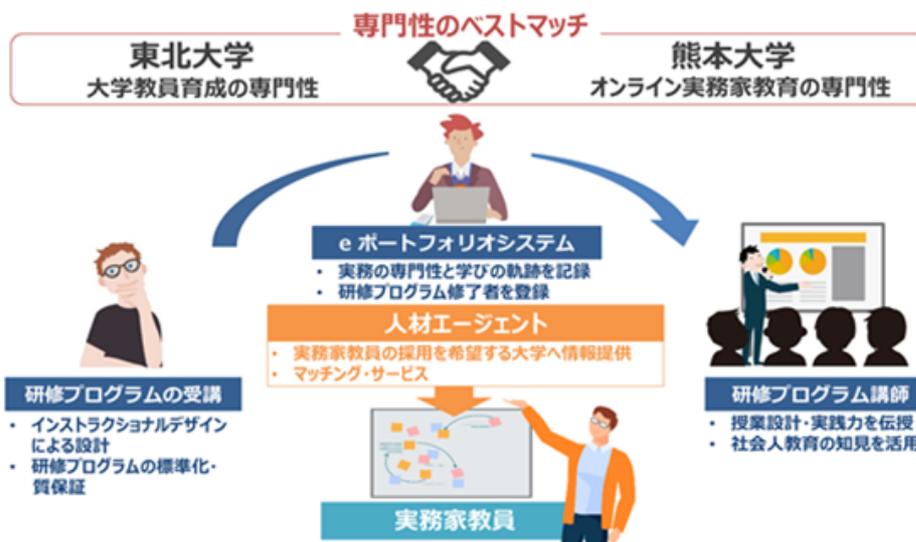
運営拠点

本センターは事業の運営拠点として、プログラムの修了者と実務家教員の採用を検討している大学間のマッチングを行うため以下のシステムの構築へ協力しています。

運営拠点

実務家教員育成・活用ナショナルシステム

～人材と知の往還のための人材エージェント～



ポータルサイトの開発・運用	事業全体の情報発信
人材エージェント業務	全ての研修の修了者データベースを構築し、大学とマッチング
研修プログラムの質保証	全研修プログラムの質保証のため、拠点間で標準化を推進等

今年度は、プログラムの一環として、「researchmap」および「JREC-IN」を活用して、どのようにキャリアアピールにつなげるのかを学習できるオンラインコースおよび対面セッションを提供しました。

連携研究組織

- 株式会社 ベネッセコーポレーション
- 熊本経済同友会
- 株式会社 農林中金アカデミー
- 株式会社ソシオテック研究所
- 大塚製薬株式会社
- サンライトヒューマンTDMC株式会社
- リープ株式会社
- 富士通ラーニングメディア
- 特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソーシアム
- アル-株式会社
- 東京都ビジネスサービス株式会社
- デジタルハリウッド株式会社

連携研究員

連携研究員（一般）（合計：30名）：五十音順

氏名	所属機関と研究テーマ	
天野 慧	熊本大学	教育メディアをデザイン・活用する枠組みに関する研究
生田 正美	神奈川県立足柄上病院	救急臨床現場で役立つ新聞デジタルアーカイブの開発～二次救急看護師のための研修以外での人材育成～
石田百合子	熊本大学教授システム学研究センター	自律的キャリア形成を意識した職場内教育に関する研究
岩永康之	社会医療法人緑泉会 米盛病院	学習システム開発、チェックリスト、IDの第一原理、ガニエの9教授事象
大石 奨	豊田市消防本部 担当長	人材育成事例検討会の実施
奥 典宏	十日市場こどもクリニック 院長	IDに基づく効率的・効果的・魅力的な保護者教育の方策について
甲斐晶子	熊本大学 教授システム学専攻 非常勤講師 熊本大学 教授システム学研究センター 特定事業研究員 桜美林大学 慶應義塾大学 非常勤講師	自律的な日本語学習を支援するための学習環境の向上を目的としたデザイン研究
加藤幸路	サンライトヒューマンTDMC株式会社 コンサルタント	教材やeラーニングの設計・開発・評価による企業教育の支援
川村 和美	株式会社ジョヴィ ファーマシープロモーター	教育プログラム

川端潤	久留米大学病院	1)オンライン（脳内）シミュレーションeラーニング教材の開発（シナリオ学習） 2)eポートフォリオによる独学支援と継続学習
北川周子	株式会社エデュプレイ 代表取締役	Moodleを活用したICT教育の有用性、コンピテンシーに基づく評価の可視化
工藤 由美子	株式会社QQ English	小学校教員とALT との授業打合せのための研修設計
小池啓子	埼玉医科大学短期大学看護学科	中堅看護師の行動変容を促す研修支援パッケージの開発、教育担当看護師支援に関する研究
佐藤 久恵	千代田区保健福祉部在宅支援課長	
澤山 芳枝	東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター医学教育学部門	認知症模擬患者養成プログラムに関する研究
高橋暁子	徳島大学高等教育研究センター学修支援部門EdTech推進班 准教授	インストラクショナルデザイン、オンライン学習
竹岡篤永	明石工業高等専門学校	インストラクショナルデザイン、SCC（ストーリー中心型カリキュラム）
立和名 房子	大阪YMCA国際専門学校	初任日本語教師のための教案作成支援ツールの開発
田中洋一	仁愛女子短期大学	深いアクティブラーニングのための心理的安全性尺度の開発と評価
土屋 理恵	日本ウェルネススポーツ専門学校 広島校 校長	日本語教育、教師研修、専門的な学習共同体

富永 志津 江	(独) 高齢・障害・求職者雇用支援機構 大分職業能力開発促進センター	成人キャリア開発
豊場 沢子	JCHO中京病院附属看護専門学校	看護教育における教授法開発
中山 かつ よ	中部労災看護専門学校	働く人を支援する看護の教材開発 看護基礎教育
西村 由 弥 子	—	薬剤師の生涯学習
丸山文枝	東京家政大学 造形表現学科 メ ディア・情報デザイン研究室 非 常勤講師 ソニーデジタルネットアプリケー ションズ株式会社 UIUXデザイ ナー	デジタルデザイン科目生における プレゼンテーションの練習とその 効果
増永恵子	順天堂大学医学部附属静岡病院	勤務帯リーダー、リーダートレー ニング、プロジェクトマネジメン ト、ID第一原理
宮道 亮輔	東京慈恵会医科大学 救急医学講座	経験学習を支援する教材の開発と 評価
森田 淳子	東京工業大学リベラルアーツ研究 教育院 准教授	日本語教育・教育工学・インスト ラクショナルデザイン
芳賀了	山梨県立大学看護学部	医療安全、看護教育、シミュレー ション医療教育、看護師のキャリ アデザイン
吉田 明恵	—	—

連携研究員（博士後期課程学生）（合計：25名）：五十音順

氏名	研究テーマ
石井嘉明	遠隔学習者支援のための可視化に関する研究開発
市村由起	MOOCsデザイン、学習の質を高めるコース設計
大庭小百合	態度変容を促す効果的なブレンド型研修プログラムの設計に関する研究
笠村淳子	国際チュータートレーニングプログラムの仕組み、理論的背景とその効果
カッティング美紀	eポートフォリオを運用した短期海外プログラムの学習成果を示すエビデンスの特定・収集・評価とアセスメントシステムの構築
亀ヶ谷 友佑	リフレクションのモデル・ガイドライン・具体的手法の構築と効果測定 -PBL授業におけるリフレクションを実践例として-
菊内由貴	事例演習中心の独習型がん看護研修の臨床応用の促進方略の確立
クハルク アレクセイ	Collaboration in Professional Development
小林菜穂子	看護学生のアセスメント能力育成に向けた補完教育プログラムの開発～ID理論と超音波エコーを用いた学習支援～
齊藤千恵子	インストラクショナルデザインを活用した授業コンサルテーション支援ツールの構築
篠塚麻衣子	初級中国語教育における母語話者との遠隔交流がもたらす効果と授業デザインの研究
杉木大輔	救命救急センターにおけるパフォーマンスサポートシステムの開発研究

鈴木真保	ID理論をメンタリング行動理論へ移植する方法の検討
鈴木雄清	ARCS動機づけモデルに基づく学習意欲を高めるための授業改善支援システムの構築
須曾野仁志	学習者によるナラティブを重視したデジタルストーリーテリング学習環境のデザイン
長岡千香子	フィールドワーク等の学習イベントでの学習者間のやり取りを重視したSNS連携情報共有ツールの設計および開発
中島 奈美	看護学遠隔授業でのゴールベースシナリオ教材の学習効果の検証
長沼 将一	メタ認知能力の育成およびキャリア形成の支援を目指したオンライン・グループ・キャリア・カウンセリング手法の提案
中前雅美	臨床現場での行動変容を目標とする学習方略の確立について
政岡祐輝	看護師のリフレクションの促進と育成に向けた自立型の学習支援に関する研究
増山純二	救急看護師を対象にしたリフレクションツールソフトの有効性について
三井一希	初等教育機関における授業設計支援システムに関する実証的研究
八木街子	看護実践能力育成ためのストーリー型eラーニング教材の開発研究
吉村 友希	作業療法学生の主体性を育てる授業デザインに関する研究
渡邊浩之	学生チューターの成長を促すツールの設計と評価

研究成果

学術論文

- 鈴木克明・平岡齊士（2021）ICT を活用した授業デザイン原則の提案 -交流距離理論の足場かけ総量再解釈に基づいて-. 名古屋高等教育研究第21号, 21 : 143-165.
- Suzuki, K. (2020) Contribution of the Japan Society for Educational Technology toward a Super-Smart Society (Society 5.0). Information and Technology in Education and Learning , 2021, 1(1) : 1-7.
- 平岡齊士（2021）ICTを活用した教育設計—非同期学習の設計を中心として. 産業精神保健, 29(1) : 12-17.
- 合田美子（2020）インストラクショナルデザインによるオンライン教育の質保証 . 品質, 50(4) : 36-42.
- Xiaohong Zhang, Kenichi Kubota, Mayumi Kubota, Kedong Li. (2020). Designing blended learning environments with thinking tool strategies: examining a Chinese teacher's decision-making and beliefs. Interactive learning environment. Interactive Learning Environments. 1-14.
<https://doi.org/10.1080/10494820.2020.1848874>
- Xiaohong Zhang, Kenichi Kubota, Mayumi Kubota, Kedong Li. (2020). The Changing Process of Chinese Teachers' Belief when Using Thinking Tools, International Journal for Educational Media and Technology. 14(1), 38-45.

書籍

- 柴田喜幸, 鈴木克明（共著 担当範囲：インストラクショナル・デザインと構造化の功罪（第17章）, 187-199）（2020）指導医のための医学教育学：実践と科学の往復. 錦織宏・三好沙耶佳（編）.
- C.M.ライゲルース(編), B.J.ビーティ(編), R.D.マイヤーズ(編), 鈴木, 克明(監訳)（2020）学習者中心の教育を実現するためのインストラクショナルデザイン理論とモデル. 北大路書房 .
- 鈴木克明（共著 担当範囲：キャリア形成及びキャリアコンサルティングに関する教育並びに普及活動（第16章）, 474-492）・石田百合子（2020）キャリアコンサルタント：その理論と実務. 日本産業カウンセラー協会.
- Xiaohong Zhang, Kenichi Kubota, Mayumi Kubota. (2020). Activity Design for Cultivating Students' Critical Thinking Dispositions in Blended Learning Environment through a Case Study of Media Literacy Course,. In: Cheung S., Li R., Phusavat K., Paoprasert N., Kwok L. (eds) Blended Learning. Education in a Smart Learning Environment. ICBL 2020. Lecture Notes in Computer Science, vol 12218. Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-030-51968-1_18

国際会議

- Goda, Y., Arame, M., Handa, J., Toda, M., Matsuba, R., Zhou, H., Itoh, M., & Kitazaki, S. (2020.12) Development of a Short-Form Learning Style Inventory for Automated Driving Safety Education.
- Goda, Y, Sudo, K, Hommyo, S. (2020.12) Design of a Self-Development Support System for Workplace Learning.

- Xiaohong Zhang, Kaoru Matsubayashi (2020). A University Course to Cultivate Students' Inquiry-mind When Writing News Stories. International Conference of Media in Education. August 2020.

国内会議

- 合田美子・新目真紀・半田純子・戸田真志・松葉龍一・周慧萍・伊藤誠・北崎智之（2021.3）自動運転車に関する安全教育受講への動機づけ動画の開発．日本教育工学会第38回春季全国大会（オンライン）講演論文集，365-366
- 鈴木克明・平岡齊士（2021.3）交流距離理論に基づいたICT大学授業デザイン原則案．日本教育工学会第38回春季全国大会（オンライン）講演論文集，319-320
- 喜多敏博・北村光司（2021.3）子ども安全に関する情報のLINEボットによる提供・収集・分析．日本教育工学会第38回春季全国大会（オンライン）講演論文集，87-88
- 鈴木克明（2021.3）コロナ時代の教育研修（教育企画）．第13回日本医療教授システム学会総会・学術集会．
- 鈴木克明・加藤幸路・平岡齊士（2020.9）交流距離理論の足場かけ総量からの再解釈提案．日本教育工学会第37回全国大会（オンライン）発表論文集，139-140.
- 平岡齊士・長岡千香子（2020.9）君たちはマンガでどうわかるか．日本教育工学会第37回全国大会（オンライン）発表論文集，217-218.
- 鈴木克明・喜多敏博・平岡齊士・長岡千香子・山下藍・張曉紅（2020.9）教育改善スキル修得オンラインプログラム第二弾「自律学習支援編」の構想．第45回教育システム情報学会全国大会（オンライン）発表論文集，51-52.
- 長岡千香子・喜多敏博・平岡齊士・山下藍・鈴木克明（2020.9）履修証明プログラムにおける修了証明書(電子版)の開発と運用 -ポートフォリオおよびデジタルバッジとの連携-. 第45回教育システム情報学会全国大会（オンライン）発表論文集，21-22.
- 平岡齊士・石田百合子・鈴木克明（2020.9）教材設計科目の添削効率化と添削者育成のためのチェックリスト開発．第45回教育システム情報学会全国大会（オンライン）発表論文集，19-20.
- 合田美子・山田政寛（2020.9）憧れや目標を持つことの学びへの影響 -大学生における生涯学習とキャリアレジリエンスとの関係-. 第45回教育システム情報学会全国大会（オンライン）発表論文集，183-184.
- 張曉紅（2020）大学生のビジュアル成果物による創造的思考の分析，日本質的心理学会全国大会，静と動のビジュアル・ナラティブ（会員企画シンポジウム），10月25日。

講演

- 鈴木克明（2021.3.12）インストラクショナルデザインで斬る．指導医のための医学教育学プログラム「京大FCME」（Foundation Course for Medical Education）.
- 鈴木克明（2021.2.22）コロナ禍のオンライン教育経験を次世代の大学づくりに活かす．名古屋女子大学講演会．
- 鈴木克明（2021.2.15）高等教育の新常態とは？．令和2年度徳山工業高等専門学校FD講演会．
- 鈴木克明（2021.2.2）オンライン授業におけるインストラクショナルデザイン～コロナ禍の経験を活かして大学の授業をアップグレードするために～．法政大学2020年度第3回FD教員セミナー．
- 鈴木克明（2021.2）大学教育とICT活用-学生が学び続ける遠隔授業のデザイン．九州看護福祉大学2020年度SD講座（録画講演）．

- 鈴木克明 (2021.1.29) 国際協力分野の人材育成・研修をインストラクショナルデザインの視点で再考する. 2020年度 研修マネジメントセミナー.
- 鈴木克明 (2020.12.21) 看護実践能力を高めるオンラインでの学びを支援する. 神戸女子大学看護学部2020年度第1回FD講演会.
- 鈴木克明 (2020.12.17) Withコロナ時代の「教えない」新人教育. 特別無料セミナー, 株式会社パーソル総合研究所.
- Suzuki, K. (2020.12.9) Educational Technology Trends Toward a Super-Smart Society (Society 5.0) in Japan (Special Session 2). IEEE TALE2020, An International Conference on Engineering, Technology and Education
- 鈴木克明 (2020.12.5) IDの視点から見たオンライン授業の在り方 (特別講演II). 第6回臨床工学技士養成教員学術研究会
- Suzuki, K. (2020.12.4) Society 5.0 and Role of Educational Technology in Japan. 2020 Annual Conference of Taiwan Association for Educational Communications and Technology.
- 鈴木克明・森田晃子 (2020.12.1) アウトプットをデザインする～ニューノーマル時代の企業内教育～ (S-102A 特別セッション). ヒューマンキャピタル/ラーニングイノベーション2020オンラインセミナー.
- 鈴木克明 (2020.11.16) 緊急対応としての遠隔教育から次世代大学の創設へ (基調講演). 令和2年度IDE大学セミナー「大学教育の新常態? オンライン教育の経験は持続的変化をもたらすのか」.
- 鈴木克明・寺田佳子・合田美子・紙谷あゆ美・小池啓子 (2020.11.13) 学習者中心の教育を実現する インストラクショナルデザインの理論とモデル. eラーニングアワードフォーラム【e-Learning専門人材トラック】.
- 鈴木克明 (2020.10.27) オンライン授業における成績評価のデザイン. 帯広畜産大学FD研修会.
- 鈴木克明・加藤幸路・平岡齊士 (2020.10.18) ムーアの交流距離理論の足場かけ総量による再解釈への軌跡. 日本教育メディア学会第27回年次大会
- 鈴木克明 (2020.9.23) オンライン教育ツールを用いた授業改善の方法. 岩手県立大学社会福祉学部FD研修会 (オンライン開催).
- (2020.9.20) 看護実践能力を高めるオンラインでの学びを支援するインストラクショナルデザインの活用. 高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業看護福祉部会主催オンライン教育講演会 (オンライン開催).
- 鈴木克明 (2020.9.15) オンライン教育の実施・評価: これからの展望. 横浜創英大学FDワークショップ.
- (2020.9.7) 学生が学び続ける遠隔授業のデザイン (特別講演). 中村学園大学・短期大学部教育ワークショップ (非同期オンライン開催).
- 鈴木克明 (2020.9.5) 『新しい生活様式』におけるより良い授業のあり方. 東京理科大学第27回FDセミナー (事前録画講演).
- 鈴木克明 (2020.8.30) アカデミックリーダーのためのインストラクショナルデザイン. 東北大学PDセミナー (オンライン開催).
- 鈴木克明 (2020.5.19) オンライン授業「導入・検討」大学の9割超 現場の教員に負担も. NHKニュースウォッチ9 (テレビ番組出演).
- 鈴木克明 (2020.5.11) オンラインによる学生指導のあり方. 東北大学医学部教室員会主催ウェブセミナー.
- 鈴木克明 (2020.5.9) 「遠隔授業のコツ」. 共同通信社取材
- 鈴木克明 (2020.4.23) eラーニング活用と高等教育の質保証. 第100回客員教授セミナー 第4回教育の質保証に関する研修セミナー.

- 鈴木克明 (2020.4.22) 無理はしないで同じ形を目指さないこと：平時に戻るまでの遠隔授業のデザイン。【第4回】4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム 2020年4月22日 国立情報学研究所 大学の情報環境のあり方検討会。
- Suzuki, K. (2020.4.16) Japanese Society 5.0 and Educational Technology Research (Invited Plenary Session). 25th Technology, Colleges & Community (TCC) online conference.

その他

- 鈴木克明 (2021) コロナ禍で注目のオンライン教育と大学界の展望に迫る(特集インタビュー)。『大學新聞』第189号。
- 鈴木克明 (2020.12) 国際基督教大学同窓会DAY賞 (Distinguished Alumni of the Year Award) 2021受賞

外部資金

- 久保田真一郎・松葉龍一・平岡齊士・合田美子・鈴木雄清 (2021) 学習ログにおけるバーストをもとにした学習行動の分類と学習支援。2019年度－2021年度科学研究費補助金 (基盤研究(C))
- 平岡齊士・松葉龍一・宮崎誠・久保田真一郎・長岡千香子 (2021) 生涯学習における自立的eポートフォリオ構成・活用能力修得のための学習支援環境構築。2017年度－2020年度科学研究費補助金 (基盤研究(C))
- 合田美子・山田政寛 (2021) 自己調整学習を越えて：生涯にわたって成長するための学習モデルの開発。2017年度－2020年度科学研究費補助金 (挑戦的研究(萌芽))
- 戸田真志 (2021) 不均一性を前提とした海中浮遊物の利用による環境負荷の低い三次元水流計測システム。2018年度－2020年度科学研究費補助金 (基盤研究(C))
- 江川良裕 (2020) 経験学習における統合型WBS、技法・ツールの標準化に関する研究。2020年度－2022年度科学研究費補助金 (基盤研究(C))
- 松葉龍一・永井孝幸・甲斐晶子・鈴木雄清・平岡齊士 (2020) 国際連携による学習者個々に最適化された学習を支援するICT学習基盤の検討・開発。2020年度－2024年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))
- 合田美子・山田政寛・石毛弓・田中洋一・山本佐江 (2020) データ駆動型・ナレッジ駆動型アプローチを融合させたフィードバック誘起モデルの開発。2020年度－2023年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))
- 都竹茂樹 (2020) 運動技能修得のデザイン原則を用いた、筋力トレーニング指導者育成eラーニングの開発。2018年度－2020年度科学研究費補助金 (基盤研究(C))
- 喜多敏博・松居辰則・北村光司・富田賢吾・苑田裕樹 (2020) 教育で防ぎ得た重大事故を防ぐ能動的LMSを軸とする安全教育システムの実現。2019年度－2021年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))
- 鈴木克明・平岡齊士 (2020) 特定領域に強い教育設計専門家を養成する学習環境構築に関する総合的研究。2016年度－2020年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))

参加報告（国内学会1）

学会名：教育システム情報学会全国大会

期間：2020年9月2日(水)～4日(金)

開催地：オンライン開催

教育システム情報学会全国大会が、2020年9月2日から4日の日程で開催された。新型コロナウイルス感染症対策のためオンラインでの開催となった一般セッションや企画セッション、特別公演などはZoomを利用して行われ、インタラクティブセッションはRemoを利用して行われた。Remoは仮想空間に仮想の部屋のような仕切りがあり、同一部屋内のユーザのみがカメラや音声などを使いコミュニケーションをとれるシステムで、人気のあるポスターは満員で仮想の部屋に入れなかったケースなどもあった。休憩スペースなども準備され、久しぶりに会う研究者同士が近況の話などで盛り上がっていたのも印象的であった。

本研究センター関係者の研究発表もあり、本研究センター教員の合田美子先生と鈴木克昭先生が教授システム学専攻博士後期課程で指導する篠塚麻衣子氏の「ICTを活用した発音の形成的評価を導入した初修中国語授業の設計、実践と評価」が大会奨励賞に選出されました。本研究センター教員の指導する他の学生のみなさんも続いていくことを期待しています。

教授システム学の研究拠点としてこれまで以上に本学会へ寄与できるよう、理論と実践を繰り返し、教員自身が積極的に研究成果を発表する必要があると感じました。

(文責：久保田)

参加報告（国内学会2）

学会名：日本教育工学会秋季全国大会

期間：2020年9月12日(土)～13日(日)

開催地：オンライン開催

日本教育工学会秋季全国大会が、2020年9月12日から13日の日程で開催された。新型コロナウイルス感染症対策のためオンラインでの開催となった。キーノート・シンポジウムは、ミネルバ大学 創設者/CEOのBen Nelson先生で、本研究センターの合田美子先生が司会で、同センター長の鈴木克明先生がコーディネータを務めた。また、President Talkでは、鈴木克明先生が学会長として、米中韓の教育工学関係学会のトップと、各国の教育工学に関する研究動向や教育課題について議論した。

一般研究セッションは、秋季全国大会はポスターのみとなっており、本研究センター関係者の絡む発表が20件以上あった。ポスター発表は、事前にポスターをPDFで作成し公開し、発表動画の登録も可能であり、セッションはZoomまたはチャット(Jamboard)を選択できた。特に目立ったトラブルもなく、議論が盛り上がっていた。ただし、1つの発表に参加者が偏る傾向が対面よりも大きかったように感じられた。物理的な空間の制約がないことが要因かもしれない。

教授システム学の研究拠点と本学会への寄与は現状でも十分あると思われるが、さらに積極的な研究成果の発表が期待される。

(文責：中野)

参加報告（国際学会1）

学会名：

AECT (Association for Educational Communications & Technology) 2020 Virtual Convention

期間：2020年11月2日～7日

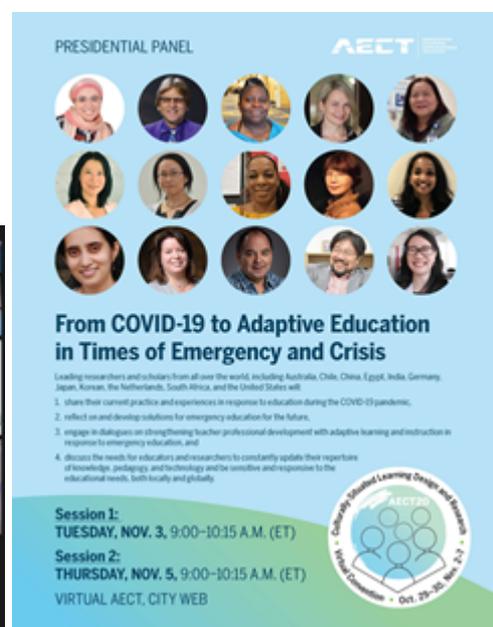
開催地：オンライン開催

2020年11月2日から7日、オンラインで開催されたAECT2020に参加しました。11月3日に実施されたPresidential Talk: From COVID-19 to Adaptive Education in Times of Emergency and Crisis (I)へ日本教育工学会(JSET)として招待され、本センターのセンター長で学会長である鈴木克明先生、国際交流委員会高林友美先生（サイバー大学）と共に、講演およびパネリストとして議論に参加しました。Presidential Talkイベントは2日間に渡り企画され、各国、各地方での、新型コロナウイルス感染症拡大に関する教育への影響と適応について、情報を交換し、今後の在り方について議論する場として提供されました。本イベントは、AECT次期会長で、2020年バーチャル学会のプランナーのXun Ge先生（The University of Oklahoma）が企画およびファシリテーターを務めました。我々が参加したシリーズ(I)では、米国より、Curt Bonk先生、Florence Martin先生がディスカッサントとして参加され、オーストラリア、米国、中国、韓国、インド、日本の6カ国から7つの講演がありました。

我々の発表は、How Do We, JSET Respond to the Pandemic in Japan?と題して、日本の政策について教育に関連する事項を簡潔に紹介した後、2019年から2020年秋までのJSETとしての取り組みと課題、今後の方向性について発表しました。各発表で、学びを止めないための多様な工夫や考慮点などが出され、これらの相違を比較することで、世界の動向を把握することができたと思います。我々の発表では、コロナ禍でのリモートやオンラインでの学びを経験した学習者の学習に対する方略や態度がより自律的な方向にむかうのではないかとという視点を共有し、本指摘について、特に、発表者や参加者の共感が示されました。米国で最大の教育工学関連の学会による国際学会ということで、世界各地から、本緊急事態を乗り切るためのノウハウがいろいろと集まってきていることを実感しました。（文責：合田）



発表者による記念撮影



イベントのポスター

2021年7月12日

コンテンツ制作者：
教授システム学研究センター教職員

監修者：
喜多敏博（教授システム学研究センター教授）

編集担当者：
長岡千香子（教授システム学研究センター特定事業研究員）
山下藍（教授システム学研究センター特定事業研究員）
石田百合子（教授システム学研究センター特定事業研究員）